

日本宗學史



30518-1-210

拜 為 謝 書 和 未 得 為 又 信
出 他 亦 知 其 意 能 志 生
依 然 無 在 一 家 也 道
必 方 由 之 而 陳 之 老 孫
接 之 子 亦 交 宋 真 之 也 一

編年之上下樣已由之通存
其下之類逐去轉之上下樣
其下之事之類逐去轉之上下樣
其下之事之類逐去轉之上下樣
其下之事之類逐去轉之上下樣

多好道心
見舟り
下りし
由通殊
碇事

善く清き心は清く静かに
老翁の心吹老の襟を
みすぬの胸の風を
如くしりし物急かす如く
之も有れば清く静かに

為之遊名者皆存
為甘之氣也如
此也
為之遊名者皆存
為甘之氣也如
此也

西都
時
景
集
想
公

121.3 N813u.k

緒言

文化の流布は、必ず淵源する所あり、其の流を治めんと欲せば、其の源を究めざる可らず、明治文運の盛なるは、徳川三百年の教化に淵源し、徳川三百年の教化は、鎌倉室町二期の風尚に濫觴せり、鎌倉時代に傳來して、室町時代に研究し、以て徳川三百年間の普通讀本たりし者は、論孟學庸の四書集註なり、四書が士人の精神教育に明效ありて、以て維新の業を立て、以て明治文運の素と爲りしは、何人も否定するを得可らず、四書集註の傳來の時期、研究の状態より、遂に普通讀本として海内に盛行するに至りし由來を考へて、以て明治文運を胚胎せし所以を

説き、將來の德育研究に資する所あるは、豈風俗澆漓の今日に
缺く可らざる急務に非ずや。

四書の海内に普及せしは訓點の力なりしことを言を待たず、四書
の訓點は、不二和尚之を創したれども、其書傳はらず、我が桂菴
禪師其の説を祖述し、文之和尙之を潤色し、如竹散人之を刊行
して、始て海内に行はれたりき、扱此の如竹は、我が郷里に隣
れる屋久島の人なれば、予は幼時より其の名を聞きて其の賢を
慕ひ、更に其の師文之和尙が作りし鐵砲記には、予が先祖の名
(織部丞時貫)あるをもて、欽仰の念いと深く、遡りて文之如
竹の學統桂菴禪師に出づるを知るに及びては、禪師の事蹟を搜
訪せん志も起り、東游數年の後、歸省の折、薩摩の平田宗高翁

を訪ふて好資料を借覽し、薩摩古文學大略といふをものせし中

に、此の三先生の事をも叙述せしは、十八年前の事なり、(明治二十

四年少年
四十五後ち薩儒伊地知潜隱先生の漢學紀源を讀みて、宋學傳來

の源委を詳にし、且つ禪師が海内騷亂の戰國に在りて、朱子の
大學章句を薩摩に刻せしは、宋學の首倡なることを知るに及び
ては、其の功績の偉大なるを三歎しき、戊申の春郷里に歸省せ
し時、予の再從兄弟にして潜隱先生の孫女夫なる月川種子島氏
は、予に贈るに禪師刻する所の延徳板大學一冊を以せり、予は
拜して而して之を受くると共に、自ら予に一大責任あるを感じ
たり、以謂へらく近三百年間の人心に入ること深かりしは宋學
なり、宋學の神髓は四書集註に在りて、四書を當時の普通讀本た

らしめし最初の功臣は此の三先生なり、第一は如竹が予の隣島に出でし關係より、第二は文之が予の祖先を顯彰せし關係より、第三は桂菴が薩摩文學の祖にして、予輩後學も亦其の餘澤に浴する關係より、宋學傳來の淵源に遡りて、四書流行の沿革を研究し、以て一には三先生の功績を發揮し、一には教化の萬一に資するは予の責任にあらざるかと、是に於て予は其の歳の夏重ねて薩摩に遊びて、桂菴文之の遺蹟を訪ひ、從弟平山仲共を屋久島に派して、如竹の逸聞を求め、更に桂菴四百年祭を大阪に修めて、専ら資料蒐集に従事せり。世の儒學を論ずる者、其の書に乏しからず、然れども巨勢正純の本朝儒宗傳の如き、應神帝に始まりて藤欽夫(惺窩)に終るも、一言桂菴師弟に及ばず、

跡部光海の本朝儒學傳は、玄惠と文之とに叙し及ぶも、亦桂菴を逸し、松下見林の本朝學原も、亦文之の弘學を稱して桂菴に及ばず、其の浪華鈔に之を補註せるのみ、室鳩巢の不忘鈔は、桂菴の功を説くも、語りて而して詳ならず、近藤正齋の右文故事は、頗る宋學の淵源に遡るも、疎略猶甚だし、正齋の博洽を以して紅葉山の祕庫に據るも、猶且つ桂菴の大學を夢想せず、其餘河口靜齋の斯文源流、那波魯堂の學問源流、杉浦正臣の儒學源流の如き、徳川文學を主として、概ね筆を惺窩羅山に起し、足利時代は皆之を忽諸に附せり、足利時代の文學は五山に在り、五山資料の湮晦の爲に、將た後世儒者の佛を忌めるが爲に、五山學僧と儒學との關係を研究せざりし結果は、桂菴の宋學に於

ける偉功も亦世に知らるゝに至らざりしなり、曷んぞ知らん文學衰微の足利時代に、宋學を傳へて世道人心を資け、以て徳川氏三百年の教化を開きし者は、五山學僧なることを、潜隱先生此に見る所ありて、漢學紀源に五山の文學を闡揚せしは、豈前人未發の卓見に非ずや、漢學紀源は後ち寫本にて東京の學者間に流行せしが、是より先き文部省が大日本教育史資料を編纂するや、鹿兒島縣より報告せし桂菴文之及び山本秋水山口九畹四先生の傳、載せて第五卷學士小傳の部に在り、桂菴傳は即ち潜隱先生の撰に據りし者にして、今の漢學紀源と、文字體裁頗る異なれども、詳審叮嚀は之に過ぎ、家法和點及び愛甲喜春の聞書をも收めたり、教育史資料一たび世に公にせられてより、桂

菴の事蹟始めて天下に明なりし者、亦先生の力なり、今人の宋學を説ける者、國學院雜誌(明治三十三年)に、花岡安見氏の「朱子學の由來」あり、東洋哲學(明治三十四年)に、足利衍氏の「朱子學の傳來と其學派」あり、單行の書には、久保得二氏の「日本儒學史」(明治三十七年)井上哲次郎氏の「日本朱子學派の哲學」(明治三十八年)川田鐵彌氏の「日本程朱學の源流」(明治四十二年)等あり、簡より繁に趨くは、其の出板の先後に隨ひ、後出の書は前出の書よりも詳備せるは、史學上當然の原則に洩れず、五山の文學此に至りて稍世に知られたるが其根據する所は、概ね皆教育史資料の桂菴傳、もしくは漢學紀源に在る者の如し、要するに宋學の淵源を論ずる者、漢學紀源の一書に過ぐるなし、顧ふに亦偉ならずや、然れども潜隱先生

薩摩に蟄居して、未だ多く名山の秘を探らず、猶脱漏あるを免れざるは當然たり、歴史は後出を勝れりと爲すは、前賢の脱漏を補ふことを得ればなり、而して脱漏を補ふことを得るは、亦前人草創の賜なり、予淺學自ら揣らず、漢學紀源其の他諸書を參考し、且略五山學僧の語録外集を涉獵し、以て此の編を作りしが、或は一二前人の遺を補ふ者ありて、德育研究に資する所あらんか、是れ後出の爲のみ、抑も又荆棘を披きし前賢の賜のみ而して予の誤脱は亦大方君子の之れを正し之れを補はんことを望む。

明治四十二年七月

著者識

緒言附記

一本書は初め宋學の首倡と題して明治四十二年一月一日より二月二十六日に至る迄の大阪朝日新聞紙上に連載せし者なるが、後ち自ら脱誤頗る多かりしを知り、更に諸書を參稽して、増補訂正する所あり、且つ本書の主旨を輔翼すべき關係詩文を附載して、標題を日本宋學史と改め、以て一冊子と爲したるなり。一本書の目的は、宋學傳來の源流を叙するに在るも、徳川時代の儒學に至りては、世其の書に乏しからざるを以て、唯其の大要を叙し、學統學說の如きは、之を省略に附したり、然れども其の敘述する所、鎌倉以來明治維新に及びて、上下六百年に俯仰し、單に一二首倡者の事蹟を闡顯するに留まらざるが故に、宋學の首倡の前名は、稍妥當ならざるを覺へつ、是れ今の名に改めし所以なり。

一學僧の略傳は、元亨釋書、日本高僧傳、漢學紀源、五山文學小史等に據れり、其の餘引據する所の事實及び評論にして、特殊なる者は成る可く其出處を明記し、以て他人の功を拵はざらんことを努めしも、予の粗漏なる、或は脱略あらん、且つ

予一己の所見と信する者にして、他人已に道破せし者もあるべし、此は寡聞に出づ、敢て他意あるに非ず。

一 本書附學を叙するに材を五山の語録外集に取りしも、名山の秘、未だ盡く寓目するを得ず、而して天台真言の各宗にも、玄惠恭畏以外の資料なきを保せず、但法海浩渺、未だ搜訪に遑あらず、博洽の君子、若し指教を賜ひて、他日の増訂に資せば幸甚。

一 五山資料を涉獵するに當り、上村閑堂君が周旋の勞を執りて借覽の便を得せしめられたる、新聞紙上に連載するに當り、肥前の楠本正翼君が重要な資料を寄示せられたる、並に感謝に堪へず。今次増訂出版に際しては、我が師成齋重野先生、遙に書を賜ひて指教する所多く、以て大誤謬なきを得せしめらる、師恩浩大、銘肝忘れず、其他讀者諸君の書を寄せて訂正に資せし人多かりしは、亦予の深く謝忱を表する所なり。

著者又識

日本宋學史目次

上編

(一) 叙論

附載 源親房の三種神器説と神儒佛論 ▲
只原益軒の神儒並行不相悖論

(二) 宋學の由來

附載 伊藤東涯の學變論

(三) 宋學傳來者

一、僧俊芻齋來說と數回分來說

二、聖一國師

大明錄と三教要略

三、宋元僧の歸化と游宋入元の諸師

僧道隆は宋學の一開祖か

附載 大覺禪師語錄

(四) 北條氏の文教……………三九

武家と禪Ⅱ禪と宋學Ⅱ宋學と武家▲金澤文庫

附載 元菴錄▲大照錄

(五) 宋學研究の嚆矢……………四九

一、後醍醐の經筵

二、建武中興と宋學

三、玄惠法印と源親房

附載 玄惠の詩康永二年内裏詩歌合

(六) 禪林の宋學者……………六七

上、虎關の禦侮

道隱と正澄

附載 濟北集通衡▲清拙日本録

下、明極と梵仙

楠正成の學

附載 赤十字と武士道▲琵琶歌武士道

(七) 中巖圓月の尊信……………八五

緇衣の儒▲中正子十篇

附載 中正子の仁義篇と性情篇

(八) 南北朝時代の學者……………九九

上、南朝の朴翁▲北朝と宋學

菅原公時▲紀行親▲藤原忠範の反對▲夢窓の識見

下、義堂と足利義滿

無文の孝論▲絶海の詩▲祖闡克勤と雲門一曲

附載 祖開克勤の詩

(九) 岐陽の四書和點……………一一一

訓點の祖

(十) 岐陽の學派……………一一七

一、雲章一慶と雲桃抄

二、雙桂得巖の師承▲惠鳳翽之の崇信

三、雲桂二門の俊秀

百丈清規聽講者▲萬里居士と太田道灌▲希世靈

彦の夙慧▲桃源瑞仙と性理

四、桂菴の講侶

關坡景澄▲了菴桂悟▲景徐周麟

(十一) 公武の學風……………一三五

廷臣の學▲一條兼良▲中原康富と花山院中納言▲清

原業忠と宣賢▲義尙將軍の好學

附載 時房兼良元長實隆の詩

(十二) 足利學校と宋學……………一四三

尊氏の興學▲上杉氏の篤志▲學校の司業▲九華叟と

北條氏康氏政

(十三) 足利時代の新文藝……………一五一

宋學と元曲▲元曲と謠曲

附載 關溪仲芳南山古劍の雜劇の詩

下編

(一) 桂菴の前半生……………一五九

桂菴の出身▲入明と宋學研究▲歸朝後の桂菴

(二) 菊池文學と桂菴……………一六九

上、菊池武時武光の學問

征西宮と孔孟▲明國交通と文化

下、爲邦重朝の聖廟創立

菊池氏の四書▲隈部忠直の賢

附載 桂菴忠直に贈りし詩

(三) 嶋津氏の桂菴招聘……………一八三

桂菴以前の薩摩文學▲桂菴の教育法

附載 島陰集の詩

(四) 日本最初の大學刊行……………一八九

朱子著書刊行の祖▲眞の首唱者▲家法和點

附載 佐藤一齋延徳板大學跋

(五) 桂菴の後半生……………一九九

一、桂菴の晩年

二、桂菴と京師名流

二大醫と五山名僧

附載 五山諸老唱和詩

三、桂菴の學統

其門人▲東林居士▲巢松以安

附載 明人贈日本桂菴樹禪師詩

四、桂菴月渚と薩摩外交

忠首座と汪五峰

附載 豊州島津家文書

(六) 大内文學と南學……………二二五

上、大内義隆の講學

即位献資の故事▲小早川隆景の學校

下、南村梅軒と南學

梅門三叟▲元親の興學

(七) 四書の文之點……………二三五

一、文之の出身

崇澤と天澤▲二州と江夏環溪▲浮田秀家と文之

二、文之の學

其の學說▲經筵進講の評

三、文之と島津氏の文教

日新公以來の獎學▲門司光空

附載 日新公いろは歌

四、文之の訓點

恭長の破收義と砒愚論

附載 恭長の備釋一致論

五、文之の著書と門人

(八) 掖玖聖人……………二六五

上、如竹散人

中、如竹の學問

著書に勝れる刊書の功

下、如竹の徳行

如竹の門人

(九) 惺窩對文之點の疑獄……………二七九

上、藤原惺窩と林羅山

惺窩點と道春點

中、愛甲喜春の聞書

下、惺窩回護説

附四書の訓點本數種

(十) 文運の推移……………二九五

戰國時代より織豊二氏▲加藤清正

附載 加藤清正の學問

(十一) 文教の興隆……………三〇五

一、朝廷の學

附載 日本二十四孝發傳▲鳩巢小説

二、幕府の學

三、儒學獨立と國學

附儒醫

(十二) 宋學一統の由來……………三二三

上、學派四起

中、樂翁の學政更張

柴野栗山拔擢せらる▲西山拙齋の勸告

下、異學禁と其結果

附載 梁山國字上書の一節▲冢田大峰の上書及び論學辨抄
▲赤松滄洲與柴野栗山書▲西山拙齋與赤松滄洲書

(十三) 王政維新と宋學……………三六五

維新前の教育▲大日本史と日本外史▲靖獻遺言▲

薩長土肥

(十四) 結論……………三七五

宋學史餘録

薩摩の學風……………一

伊地知潛隱傳……………一七

日本宋學史寫真目次

(一)	王仁木像	(木下順菴舊藏)	八—九
(二)	朱子筆蹟	(雙鉤填墨)	一八一—九
(三)	辨圓爾筆蹟	(京都東福寺藏)	二六一—二七
(四)	一山一寧筆蹟	(京都南禪寺藏)	
(五)	道隆蘭溪畫像	(京都建仁寺四來菴藏)	三〇—三一
(六)	虎關師鍊筆蹟	(京都東福寺靈源院藏)	
(七)	後醍醐天皇御影	(京都大德寺藏)	四八—四九
(八)	圓月贊梵仙畫維摩像	(京都梅津長福寺藏)	七三—七四
(九)	中巖圓月木像	(京都建仁寺大統院藏)	一一〇—一一一
(十)	義堂周信木像	(京都南禪寺慈氏院藏)	

(十一)	岐陽方秀木像	(京都東福寺靈雲院藏)	同
(十二)	惟肖得巖筆蹟	(京都相國寺慈照院藏)	一一〇—一一一
(十三)	了菴桂悟筆蹟	(上村觀光氏藏)	
(十四)	王陽明筆蹟	(松方侯爵藏)	一二八—一二九
(十五)	景徐周麟畫像	(京都相國寺慈照院藏)	一三二—一三三
(十六)	九華及三要筆蹟	(宋版文選典書)	一四二—一四三
(十七)	桂菴和尚畫像	(著者藏)	一五八—一五九
(十八)	文之和尙木像	(薩州南州寺藏)	
(十九)	菊池武時畫像	(肥後日輪寺藏)	一六八—一六九
(二十)	菊池爲邦畫像	(肥後玉祥寺藏)	
(二十一)	延德板大學卷尾	(著者藏)	一八八—一八九
(二十二)	文之筆蹟	(萩野博士藏)	二六〇—二六一

(二三) 素書跋文 (著者藏) 二六〇—二六一

(二四) 寫本南浦文集卷首 (島津忠濟公藏) 二七八—二七九

(二五) 如竹散人筆蹟 (著者藏) 二七八—二七九

(二六) 島津惟新公木像 (島津久賢男家廟安置藏) 餘録ノ一

(二七) 島津榮翁木像 (同上) 餘録ノ一

目次 (畢)

日本宋學史

天囚 西村時彦著

上編

(一) 叙論

我が日本國民の道德の基礎は、神代以來の固有の美德と、應神朝に傳來せし儒學の感化と、欽明朝に濫觴せし佛教の弘布と、此の三者を一爐鑪の中に鎔鑄せし者是なり、所謂固有の美德は、上古の神話及び天孫降臨神武東征等の史上に表現せる事實に徴して、正直明潔を好み忠勇質實を尙びしを知るべく、源の親房が三種の神器を論じて、智仁勇を説きし者、又能く其の體用を發明せり、然れども、上代の政化簡樸人心醇良にして、未だ道德上の名目あるを聞かず、譬へば忠孝仁義の行

國民道德

三種の神器固有の美

儒學傳來の賜

ありて忠孝仁義の名なきが如し、忠と曰ひ孝と曰ひ仁と曰ひ義と曰ふの類は、二千年來未だ嘗て譯語を用ひず、單に音を以て之を稱し、而して其の義は自から明かなること、實に儒學傳來の賜なり、儒學は忠信孝悌仁義禮智等の道德上の名目を立て、人道の踐履を指導するが故に、是れを名教と曰ふ、我が國儒學を傳へ名教を講ずるに及びて、倫理教育の原則始めて明かに、實踐道德の標準も亦定まり、教化の道此に備はりて、能く風を移し俗を易ふことを得、以て文質彬々たるを致せり、之に加ふるに佛教の因果と戒定慧とを以して、民に諭すに諸善奉行諸惡莫作を以し、此に幽明二世の教を兩立して、以て長く我が國の心靈界を支配しつゝ、國民性をして崇高醇正の域に躋るを得せしめたりき。

國民性の崇高醇正

固有の美德あるに非ざれば、儒學を收用して同化の効を示すこと如此なる能はざりけん、固有の美德ありとも、倫理の原則を定め、道德の標準を立てざれば、教化の全くして人文の進むを望む可からず、即ち儒學の傳來は、交通上自然の結果なるを疑はずといへども、亦天與の福なりとや謂はん、而して能く國民精神上の要求に應じたりし者なるは、傳來當時の感化極めて激烈なりしに徴すべし、何ぞや

儒學の感化

應神二皇子の推讓と仁徳の仁政と是なり、蓋し儒書の傳來は神功征韓圖籍を收めし時に在りとは、先輩松下見林の本朝學原已に之を言へり、然れども儒學を講せしは王仁が論語を獻せし時に始まりて、先づ其の教を受けし者は大鷦鷯稚郎子の二皇子なりしが、遂に死を以て位を讓るに至り、而して仁徳位に即くや、民の富は朕の富なりと爲して、三年租税を免じ、宮室頽壞するも修めず、其の工を起すに及びて、庶民子來不日成之は、文王の靈臺に於けるが如く、偕樂の道を行ふて聖主と稱せられたまふも、亦儒學の明效なり、此の二者以て如何に儒學の感化深刻なりしかを見るべく、(安積良齋の稚郎子論にも問學の力多きを言へり)感化の深刻なりしは、精神上の要求甚だ盛なりしを證する者なり、要求盛なりし時に傳來せしが故に、感化も亦深刻なりし儒學が、此の時よりして深く國民の精神を支配して、倫理教育の基礎と爲りしも、亦宜ならずや。

佛教傳來の反響

佛教傳來當時の反響も亦激烈なりしが、其は儒學と反對せる現象なりき、儒學が時代の要求に投合して、朝廷に歓迎せられしこと彼の如き者あり、而も佛教は物部中臣二氏の有名なる反抗ありて、内亂をさへ惹起せり、物部氏敗れて蘇我氏勝

ちしとゞもに、佛法流布の端を發し、聖德太子出るに及びて滔天の勢ひを得たりといへども、其の初や、寺は燬かれ佛像は河水に投せられて、遂に血を法旛に注ぐに至りしが如き、慘の亦慘なる者なり、書紀に據れば、佛法渡來は、儒學傳來の二百六十餘年後に在り、然れども國初の紀年、古事記は書紀より短縮三百數十年なれば、儒佛の渡來、左程年數相隔たりしにあらで、大體相前後して渡來せしならんとの説あり、(成齋先生の考)其の年數未だ確ならざるも、儒學先づ入り佛教後に來りしとすれば、儒學は早く已に神ながらの美德と同化して、漸く人心に入り、國民道徳の主位を占めしか、果して然れば物中二氏の排佛は、獨り神派を代表するのみならず、亦儒家の精神を發揮せしものに似たり、就ち是れ神儒連合の排佛なり、然るに後世能く三者を一爐鞴中に鎔鑄するを得たるは、抑何の故ぞや、佛法自ら同化を神儒に求め來りしを以なり、蓋し佛徒は渡來當初の激烈なる反抗と深大なる打撃とに鑒みて、反省する所あり、敬神の國に於て、崇儒の時に處し、之と相争ふの不利を自覺しければ、強ひて罅隙を杜ぎて枉げて同化を求めんと欲せり、是に於て神佛混淆の典と爲り、儒釋不二の論と爲り、本地垂迹の説と爲れり、聖德太子

神儒聯合の排佛

神佛混淆と儒釋不二

の憲法十七條は、佛說儒意を參酌し、行基菩薩は伊勢の神託に託して、神佛牽附の端を開き、弘法大師の三教指歸(儒釋老)は、祿其の中に在るを稱し、眞言の兩部神道は、聖武帝の口輪是昆盧遮那の夢に本づきて、天照大神を大日如來に配し、或は孔子を儒童菩薩と稱へ、或は神宮寺を立て、神佛を合祀する等、同化を求むる所以の者至らざる所無かりき。

儒佛の盛衰

佛氏の神儒を籠絡する所以や巧なり、是に於て神道は佛臭き宗教に變じたり、而して儒家者流も菅江南式に論なく、亦皆時風に染みて、或は佛經を手寫し、或は佛前に頂禮祈禱して、互に相接近し、遂に陽佛陰儒外儒内佛の世と爲り、殆ど分別する所なし、朝廷専ら佛教を崇ぶに及びて、儒學自から衰へ、學校廢せらるゝに及びて、子弟皆寺院に學び、寺小屋の制此に權輿して、儒學も亦僧徒の手に歸し、大江匡房が答宋の書を作り、清原頼業が宋使文書の禮なきを論せしが如き、猶儒生の爲に氣を吐くを得たれども、源平以降、兵亂相踵ぐに及びては、朝廷の文教地に墜ちて、釋奠法の如くならず、豆籩の備疎に、積弊の儲廢するに至り、(建久二年宣旨)長袖の子弟、弄ぶ所の者は詩のみ、武人不文、軍中の檄、皆緇徒に成り、頼朝の文覺慈圓に

儒家と僧

於ける、義經の鞍馬僧正と辨慶とに於ける、義仲の覺明信教朗詠集注者に於ける、並に僧侶に師事せし慣例は、延きて北條氏の禪に學び、足利氏の文書を禪家に委するを致し、利さへ佛徒は政事教育外交にも携はり、當時唯一の學府なる足利學校の祭酒すら、常に佛子の居る所と爲り、國內大小侯伯の家庭教師は、悉く皆沙門ならざる無く、太閤の征韓に通文の役を掌りしも、亦五山の三南禪の靈三、兌相國の承兌、哲東福の永哲等なり、徳川氏興るや、其の例に因襲して、學僧を帷幕の中に延き、且つ足利學校の三要を擢んで、學政を委し、林氏を以て儒員と爲すも、亦強ふるに僧形僧官を以し、元祿三年、儒員の密髮叙爵を命せし迄は、實に儒佛を分たざりき、一方には兩部神道に對して吉田家の唯一神道起りしも、猶眞言宗より換骨胚胎せるに過ぎず、尋ぎて吉川流の神道崛起して排佛を事とせしも、大勢を如何とす可からず、山崎闇齋が垂加派を唱ふるに、述べて、更に神儒抱合を求め、貝原益軒も亦神儒並行を論じ、其の餘佛敎を忌める各派神道も、亦皆儒學の精神を脱せる者、未だ嘗て之あらず、是に於て我が國の神儒佛三敎は、蜘蛛手十文字に聯絡して、接觸摩蕩し融會流通しつゝ、國民の性靈界を支配すること、此に一千數百年

神儒佛の
同化

漢土の儒
佛關係

なり。

漢土に於ける儒佛關係は之に異れり、學者孟子の揚墨を闢きし功を稱へて、禹の治水に比してより、異端を排斥するを儒學の本色と爲せり、其の最も顯はるゝ者を韓退之論佛骨、表歐陽修本論等と爲す、佛氏も亦儒老を指して外道と曰ひ、異端外道の兩々相争ふ者久し、是に於て宋の明敎大師(契嵩)は補敎編を著はして、儒釋の一致を論じ、以て調和を求めたり、明敎は實に彼の國に於ける弘法なり、此の書世道に益あり、時人耳を傾く者なきにあらざりしも、儒學界は猶之が爲に動されずして、儒佛關係は決して我が國の如き能はざりき、我が國の儒佛關係や、一面より之を言へば、雜亂紛淆洵に悲しむべきが如しと雖も、一面より之を觀れば、儒佛相輔けて、以て道德の向上人文の發達に資する所の者甚だ大なり、是れ我が國文明史上の一大異彩にして、此の異彩を生せし所以の者は、我が國體支那と異り、萬世一系、天壤と無窮なるより、神ながらの固有の美德ありて、之が素を爲し之が調和を爲しつゝ、儒佛二者を包容同化せしに因らすんば、あらず、故に儒學は日本の儒學と爲り、佛敎も亦日本の佛敎と爲りて、三者を打ちて一九と爲して、日本魂と

國體と儒
佛

曰ひ武士道と曰ふ者を陶鑄し來れり、而して予の所見を以すれば、其の大部分を占めて道德の基礎と爲る者は、儒學なり。

儒學傳來して以後、論語一部は如何なる時代如何なる人物も、之を棄てしことあらざりき、假令之を通讀せざる迄も、論語中の一二語を諳んじて修身齊家の教訓と爲さざる者やある、假令ひ其の語を諳んせざる迄も、其の意義を聞知らざる者は、匹夫匹婦といへども恐らくは之なからん、日本の譯語なき忠孝の二字を、人々直に音讀して其の義を會得するが如き、實に其の一例なり、豈貴重なる經典に非ずや、論語に大學中庸孟子を加へて四書と曰ふ、四書は實に徳川時代に於ける士民教育の普通讀本なり、此の普通讀本を得て徳川氏三百年の教化は成れり、徳川氏三百年の教化は、維新鴻業の立ちし所以なり、維新後四十年、日本魂は時ありてか世界に發揮し、武士道は時ありてか中外に奮揚して、以て今日に至れり、國家の今日ある所以を推究せんとせば、徳川氏三百年の教化に遡りて、四書の由來を知らざる可からず、其の淵源を考へて其の來歴を尋ね、以て今日以後の國民性涵養に資する所あらんとするは、本編の目的なり。

論語と國

四書は普通讀本



王仁木像 木下開其

附 載

三種神器と神儒佛

北 島 親 房

三種の神器世に傳ふ事、日月星の天に在るに同じ、鏡は日の體なり、玉は月の體なり、劍は星の氣なり、深き習あるべきにや、抑かの寶鏡は、さきに記し侍る石凝姥命の作り給へりし八咫の御鏡、八咫に口傳あり、玉は八咫瓊の曲玉、玉屋命、天明玉とも云ふ、作り給へる也、八咫にも口傳あり、劍は素盞鳥尊の得たまひて、大神に奉られし叢雲の劍なり、この三種につきたる神勅は、まさしく國を手持ちますべき道なるべし、鏡は一物をたくはへず、私の心なくして萬象を照すに、是非善惡の姿あらはれずと云ふ事なし、その姿に従ひて感應するを徳とす、これ正直の本源なり、玉は柔和善順を徳とす、慈悲の本源なり、劍は剛利決斷を徳とす、智慧の本源なり、この三徳を翁受けずしては、天下の治まらんこと誠に難かるべし、神勅明にして詞約かにひね廣し、剩さへ神器にあらはしたまへり、いと忝なき事にや、中にも鏡を本とし、宗廟の正體とあふ

がれ給ふ、鏡は明を形とやら、心性明なれば、慈悲決断は其の中に在り、又まさしく御影をうつし給ひしかば、深き御心を留めたまひけんかし、天にある物日月より明なるはなし、仍て文字を制するにも、日月を明とすといへり、わが神大日の靈にましますれば、明德を以て照臨したまふ事、陰陽におきてはかりがたし、冥顯につきて頼みあり、君も臣も神明の光胤を受け、或はまさしく勅を受けし神達の苗裔あり、たれかこれを仰ぎ奉らざるべき、この理をさとりその道に違はずば、内外典の學問も爰に極まるべきにこそ、されどこの道、弘まるべき事は、内外典流布の力なりと云ひつべし、魚をうる事は網の一目によるなれど、衆目の力なければ、これを得ること難きが如し、應神天皇の御代より、儒書を弘められ、聖德太子の御時より、釋教を盛にし給ひし、これみな權化の神聖にましますれば、天照大神の御心をうけて、わが國の道を弘め深くし給ふなるべし、(神皇正統記)

觀房の三教論

神儒並行不相悖論

貝原益軒

益軒の神儒並行説

天地之間、道一而已、故人道即是神道、神道即是天道、非有二也、苟有與天地神明之道不同者、即是非人道也、夫我神道、清潔不穢之理、而誠明正直純一、淳朴之德、亦因清潔不穢而在焉、故以自清潔其身、兼清潔於人、爲要、所謂祓除者、亦只清潔之之謂而已矣、是乃人倫日用之常道、順方俗、合土宜、其爲教也、易簡而不煩、不巧、易則易知、簡則易從、其爲禮也、淳朴而不華、不繁、故常不失其誠、其說雖似淺近、然其中有深妙之理存焉、以是清潔其心術、新於民德、則天下和平、災害不生、禍亂不作、非如彼方外之流、絕滅倫理、遺棄綱常、說妙談空、術奇誇怪、而與天地神明之道、不相似之比也、是我邦上世神聖所傳之心法、而不待借乎外也、中世已來、華夏聖人之經典、流入我邦、其正心術、厚人倫之道、建諸天地、而不悖、質諸鬼神、而無疑者、與吾神道無異、而其爲教也、廣大悉備、精微深至、以可輔翼邦教、發明於神道、故學神道者、亦不可不學我聖人之道矣、蓋神教固是易簡之要訣、得其要者、一言而盡矣、故雖不待求於外、然得儒教之輔翼、而其理益明備矣、故謂神道無假於儒教、而自

立則尙可也。苟謂儒教無輔翼於神道則不可也。若夫禮法有水土古今之隨時隨處而不相同者。自然之理也。故雖三代聖王之制。又迭相爲沿革損益。而不因循者。順時宜而變改之也。夫古昔聖王之制作。豈有不美者乎。然隨時異宜。則雖聖人之所制。又不能不改焉者。其豈非所以古今風氣之漸變。而與時宜之乎。況我邦之距於中國幾千里。今世之去往聖幾千歲。其俗絕異。其時懸隔。今之學者。往往不察於風俗時變。以中華上世之禮法。無所斟酌。去取既爲可行之本邦之今世。是猶不知舟車之異宜於水陸。裘葛之異宜於冬夏。豈可爲識時宜乎。此人不可以語變矣。是世俗之所以嫉惡於儒教。而聖學之益溼晦也。中庸曰。生乎今之世。反古之道。如此者。裁及其身者也。王制曰。修其教。不易其俗。齊其政。不易其宜。中國戎夷五方之民。皆有性也。不可推移。孔子曰。吾學周禮。今用之。吾從周。且居魯衣逢掖之衣。居宋冠章甫之冠者。合土宜順方俗之道也。夫以本邦與中國同道而異俗。故雖聖人所作之禮法。宜乎中國。而不宜乎我邦者。亦多矣。學儒者。順其道。而不泥其法。擇其禮之宜于本邦者。行之。不宜者。而置之。不行。何不可之有。然則神儒並行。而不相悖。不亦善乎。浮屠之說。本是偏僻其道。以絕滅天理。廢棄人倫。爲則焉。與我神道不同。猶冰炭薰蕕之不相容也。然我邦自中葉。彼說盛行。其徒傑黠者。以我國俗尊神之故。往往混而一之。以謂神與佛同道。而異迹。佛是本地。神是垂迹。欺詐百端。以其道之不同。強牽合之。妄附會之。誣瀆於神明。愚弄於黎民。無所不至。以身毒之說。亂日域之道。古來學神者。往往暗乎文學。故願彼欺罔之說。不能辨其非。祇尊信其道。崇敬其徒。依倚其意。採摭其言。而立其神教。後人不知其爲浮屠之說。曰。斯語斯道。惟我神之教。嗚呼。學世咸若時。迷之而不悟焉。習矣。而不察焉。終身陷之。而不知其謬者衆也。可勝歎哉。蓋人無私心。而後好惡當於理。今也學神者。以中華聖人之禮。有不宜于我邦者。悉非其法。以謂儒教是外國之事。非我邦之道。不可行也。學儒者。以我邦神教之法。有殊于中國者。併誹其道。稱之爲異端之說。更互相爲譏議喧騰。是豈可謂好惡無私。而得其公正乎。又豈可爲知神知儒乎哉。學者之所當審察明辨。而解其惑也。

元祿四年二月十一日

筑前後學具原篤信書

(二) 宋學の由來

宋學とは宋人の學術なり、猶漢人の學を漢學と稱するが如し、漢學とは漢土の學の總稱とも爲れりしかど、漢學宋學と對稱する時は其の時代を言ふなり、蓋秦の始皇儒書を燔棄し、儒生を坑殺して、儒學は一大打擊を被りしが、漢の世と爲りて、武帝詔して遺書を搜訪し、獻書の路を開きしより、潜伏せし學者は隱匿し居たる經書を抱きて世に出でつ、是に於て遺經再ひ光を放ちしが、古書の讀み難きと、古學は文字を主として、理義は文字に寓し、仁は人也、二人を仁と爲すの類、訓詁に明ならざれば、理義を知る可らざるが爲に、學者皆註解に汲々たりき、之を漢註とは曰ふなり、註解の時代は漢魏晉唐に涉れども、漢代に始まりければなるべし、扱漢代の註も、文字簡古にして、意義晦澁なるより、唐代の學者は註の註を作りて、疏釋に従事せり、之を唐疏とは曰ふなり、疏釋の時代は唐宋に跨れども、唐に始まりければなるべし、漢註唐疏の學を、註疏學又は訓詁學とも曰ふ、古代には易詩書禮春秋を五經と爲し、樂記を加へて六經と名け、漢の世には易詩書春秋三禮を七經と

經書の數

も云ひ、唐の世には易詩書三禮三傳論語孝經爾雅を十二經と稱し、宋の世に至りて、孟子を經書の中に加へて十三經と曰ひ、所謂十三經註疏此に至りて完備せしが、専ら訓詁を事として字義の末に拘泥せし末弊は、仁義道德の説却て明かならざるを致せり是に於て、宋代の學者、天分甚だ高く氣稟極めて厚き者は、訓詁の學に甘んぜず、天命性理の微を窮めんと欲して、省察工夫の學風を始めたりき、漢學は字義を主とし、宋學は性理を主とす、是れ其の異なる所以にして、伊東東厓は學風是に於て再變すと曰へり、其の變せし所以の者は、其の進歩せし所以なり、是より先き佛法支那に入りてより、己に年所を経て、隋唐の世に至り、儒老と並び行はれ、禪宗最も盛にして、豪傑の士其中に輩出しければ、學者往々訓詁詞章を棄て、佛に入り禪に參する者なきに非ず、唐には排佛の張本たる韓退之の弟子李翱の樂山に參したる、宋には本論の著者なる歐陽修が圓通に參したる、司馬溫公の粹を以して心經を手寫し、朱子の嚴正を以して大惠語錄を挿み、圓悟と梅花の詩を唱酬したりと云ふ者、獨り禪子の私言のみにあらず、時風如此なりしを以て、先是儒家者流が之と對抗せんとして、易中庸等を祖述し、窮理盡性天命性理の説を

宋儒の性理學

儒學と宋

一洛關閩の五子

談するに至りしも、亦時運の然らしむる所か、宋元學案に、慶曆の際、學統四に起ると云へり、當時學者競ひ起り、各門戸を立て、其說紛々、多くは佛老を混せしが、世の道學者は、獨醇乎として粹なる者は、周濂溪、濂、程明道、程伊川兄弟、洛、張橫渠、關、朱晦菴、閩の五子なりと爲し、五子小異あるも、學說相似て、濂溪は直に孟子に繼ぎ、程明道は聖域に入り、朱子は精微を盡し廣大を極むと稱せらる、而して其の學說往々禪理に出入し、形貌も亦頗る相似たるより、世以て禪に出づと爲す、亦謂なきに非ず、程子は大學中庸の二書を禮記より抜きて之を表彰し、朱子其の説を祖述して、章句或問を作り、論語孟子に集註して、合して四書と稱せしは、實に其の特色なり、神髓なり、當時異學の迫害を蒙りしも、朱子歿後十一年なる寧宗の嘉定四年には、門人劉燾四書を大學に刊行し、理宗の世には、手詔して濂洛關閩の五子を孔廟に從祀するに至れり、故に宋學とは此の五子の學を言ふ、而して後人の最も尊崇して家法を遵奉する者は程朱學なり、元の世程朱を崇び、明の成祖は朱子の四書集註と周易傳義詩經集傳書經集說春秋胡氏傳禮記集說との五經四書大全を作りしより、才を試み士を取るに、一に大全に據り、清朝に至りては、漢學復古の風あり

四書は宋學の神髓

明の五經四書大全

儒學界に於ける程朱の位置

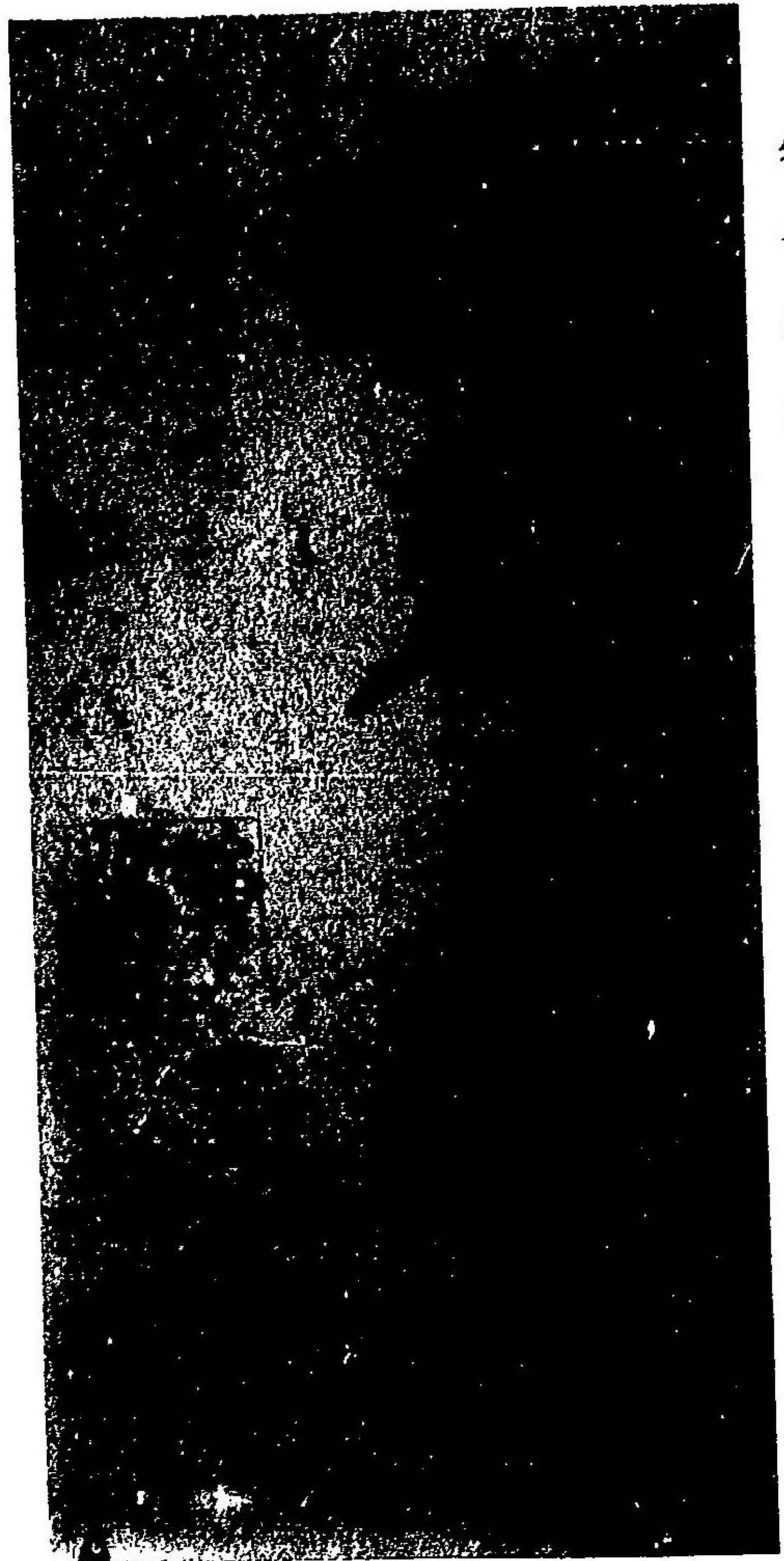
て、考据の學大に行はれ、折中の説も亦起りしが、朝廷の科擧は、猶程朱を奉じて正學と爲すこと、前代に異らず、儒學界に於ける程朱の位置や、亦盛なりと謂ふ可し、漢註唐疏派を古註と曰ひ、宋學派を新註と曰ひ、訓詁學に對しては、理學又は性理學と曰へり。

應神朝の論語

五經朝の

儒林七家

我が邦に於ける經籍傳來の明文ある應神天皇十五年は、晋の武帝太康五年なれば、論語は漢魏の古註に據て講釋しけん、其の後二百二十八年にして、繼體天皇七年に、百濟の五經博士段楊爾來りて、五經の字始めて國史に見えたり、推古朝以來、隋唐交通起りて、唐土の文學を輸入し、孝徳の朝始て博士を置き、大學寮を立て、文武の朝始て釋奠を行ひ、大寶令に學令を規定せり、(易詩書三禮左傳論語等皆漢魏の古註なり)此れより漢文學の世と爲り、大學に明經紀傳明法等の博士あり、儒流に清中管江南式善の七家あり、各其の業を世にして、政化に資する所あり、孝謙の朝、詔して天下家毎に孝經一本を賜ひ、淳和の朝始て孝經を東宮御讀初の書と定めらる、其の心を名教に留めて綱常を扶植する所以の者、至れりと謂ふべし、王朝の式微に隨ひて儒學も亦衰へ、經史の讀法に秘傳口傳の説ありて、殆ど庸醫の藥



朱
子
筆
蹟

見
家
錄

後醍醐朝
の宋學

水註と新
註

東洋の古
今學變
説

を賣ると相類し儒學の精神と漢文學の趣味と並に殆ど地を拂ふに至りしが、後醍醐帝の時に、宋學は突如として朝廷に進講せられ、此の比より古註を本註と云ひ、宋儒の書を新註と稱し、所謂新註は、足利氏の世を経て徳川氏に至り、勃然として興れりき、知らず傳來の始は何れの時にか在る。

附 載

儒學の變遷

伊 藤 東 厓

三代聖人の道、變じて今日の學と爲る、其の由來する所の者漸なり、豈唯一朝一夕の故ならんや、漢に一變し、宋に再變し、千有餘歲の間に、潛移默奪して、以て今日に至る、而して今日の學復た古の學と同じからず、蓋し唐虞より周に至るまで、治亂の跡考へて、而して知るべき也、周公より而上、上にして而して位に在り、之が禮樂兵刑を制し、之が封井宗學を設けて、以て天下の人をして教化の中に薰陶せしむ、治と道と一にして、政は徳を以て行はる、上の其身を修むる所以は、乃ち其の天下を治むる所以なり、周公より而下、下にして而

して位を得ず、成徳達材の士と、私に家庭の間に相講習して曰く、此れ先王の道なりと、百行萬善、兼舉錯施して、之が科條を叙し、其の品目を詳にし、以て其身を修め、以て諸を人に告ぐ、則ち伊傳周召の事業と同じからずと雖も、而かも其の日用彝倫を以て當務と爲し、濟世安民を極功と爲し、而して天下の人をして同じく斯道に由らしめんと欲するは、則未だ嘗て二致あらず、而して仁義禮智の四者、蓋し其の最も大に且つ要なる者なり、是より己上、更に一語なし、周衰へて戰國に接し、禮樂廢墜して、干戈日に尋き、陵夷して暴秦に至り、經書を焚き、儒士を殺し、先王の道、地を掃ふて盡きたり、漢興りて詩書稍行はれ、儒術を嚮用す、而かも當時自ら當時の法度あり、當時の政令あり、而して先王の遺文、徒に之を博士掌故の業に供し、世の儒者、私に傳授して、以て其の門を專にす、則ち治の道と岐れて、二塗と爲れり、之に加ふるに災異五行の説盛んに世に行はれ、凡そ兩行に命せらるゝ者、必數を五に取り、遂に信を以て仁義禮智に並べ、名けて五常と曰ひ、以て五行に配し、或は以て性と爲せば、則ち其の加損出入す可らざること、猶五管の内に懸り、四支の外に具るが如し、古

者事に因て教を設くるの方、遂に己に在りて一定せるの物と爲れり、是に於て平古の學、始て變じたり、斯より而して後、章句訓詁の學と爲り、詞章記聞の學と爲り、聖人の道、晦盲明ならざる者、千有餘年なり、然れども當時議論膚と雖も、而かも古を距ること遠からず、道德性命の旨、猶古の遺なり、既にして而して、復佛、聃老の教、寰區を扇動し、唯に譸張の幻を爲すのみならず、而かも識心見性の説、其の高明に乗ず、世の學士大夫、其の説を聞て、而して之を道ふことを樂み、奔走服從に之れ暇あらず、以爲らく堯舜に軼ぎて、而して孔子に翹

宋の眞儒

と、豈翹に道と治と岐れて、而して二と爲るのみならんや。
宋に逮んで、眞儒勃興し、聖道を倡明して、以て異術を斥く、其の造詣の深き、研覃の精しき、固に漢唐諸儒の能く及する所に非ず、然れども性を以て未發の理と爲し、無欲を聖と爲るの方と爲す、則ち諸れを事業に措く者、未だ斥けて以て緒餘土苴と爲すに至らずと雖も、而かも要するに其の至者に非ざるなり、必ず諸れを冲漠無朕の初に求めて、以て性と爲すときは、則ち仁義禮智の得て聞視す可らざること、猶聲の鐘中に在り、火の石中に在るが如し、徒に

其名ありて、而して竟に其の物なし、是に於て乎、古の學、再變せり、是より而後、
 循習の久しき、條貫の成る、纏綿補苴、牢ふして解く可らず、議論訓詁、出入ありと雖も、而かも竟に其の圈樞を出る能はず、唯宋明疏解の中に在りて、其の短長を校へ其の是非を争ふを知りて、而して肯て二千餘年に上下して源流の白る所を通覽せず、直に今日の學を以て、唐虞三代の學と爲す、而して其の離合沿革、復た一言に斷じ一事に辨す可らざるを知らざるなり、云々(古今學變序原漢文)

(三) 宋學傳來者

一、僧俊仍齋來說と數回分來說

漢學紀源の脱

僧俊仍齋の儒書來二卷百五十六

宋學傳來の時期に關する先儒の説一にして足らず、而して其の最古の説を立つる者は伊地知潛隱の漢學紀源なり、曰く僧俊仍は建久十年(正治)と改元(海)に浮びて宋に遊び、明年(四明)に至れり、實に寧宗の慶元六年にして、朱子卒せし歲なり、居ること十二年にして、其歸るや、多く儒書を購ひて我朝に回れり、乃ち順德帝の建曆元年にして、寧宗の嘉定四年、劉煥四書を刊行せし歲なれば、四書の類我邦に入りしは、蓋し俊仍齋し回る所の儒書に始まるべきなりと、俊仍は字を不可棄と曰ひて、肥後國飽田郡の人、九歲にして妙法華を讀み、十四顯密の教を學び、十八落髮、南北二京に遊びて、大小二乘通せざる者なく、其の宋に在るや、彼の土の士庶崇尊して、畫像を祖堂に納むるに至れり、歸朝の日傳來する所の者、佛舍利三粒、律宗經書三百二十七卷、天台章疏七百一十七卷、華嚴章疏百七十五卷、儒書二百五十六卷、雜書四百六十三卷、凡二千一百三卷、其の餘圖書碑帖器物等甚だ多かりしこと、元

前人未發
の札見

亭釋書に見えたり、俊仍は律宗の祖尼將軍の崇敬を受けて、泉涌寺の開山たりしが、安貞元年に逝けり、年六十二なり、俊仍外典の學に涉りたりといへば、程朱の書已に天下に行はれんとする時に齎し歸りし儒書二百五十六卷中、四書あるべしと爲すも理なきに非ず、日本儒學史の著者が、前人未發の卓見と稱賛せしも亦宜なり、然れども確證あるに非ずして元是れ臆測なり、臆測を以て之を言へば、俊仍以前に宋儒の書を舶載せしことなしとは言ひ難き者あり。

隋唐文
學美術

日宋貿易
の盛

入宋僧と
周張二程

蓋し文明の輸入は交通往來に在り、三韓の往來に因て儒佛傳來し、隋唐の往來に因て文學美術東漸せり、遣唐使廢して後、姑らく使聘を五代の亂に絶ちしも、宋興りて交通を求むること切なりしが、王朝の式微は閩南の翼を振ふ能はず、遂に私商をすら禁じたることありと雖も、争でか國民の發展を抑止し得べき、筑前博多を根據とせる日宋貿易は盛んに行はれたり、而して閩融帝の天元五年に於ける僧裔然の入宋、太宗の太平興國七年を始として、嘉因寂照成尋等の海に浮ぶあり、而して史上に彼我漂民の送還多きは、以て商估の名を漂着に託せしにあらざるか、時に周濂溪は成尋入宋の後、三條帝延久四年、即ち神宗の熙寧五年に卒し、張橫

宋人の書
籍送還

太極圖說
は尤早く
來りたり

日宋交通
の類案

渠は同十年に卒し、程明道は通事僧仲回入宋後八年なる白河帝應德二年、即ち神宗の元豐八年に卒し、程伊川は堀河帝の嘉承二年なる徽宗の大觀元年に卒しつ、北宋の大觀元年は、俊仍入宋の正治二年なる南宋の寧宗慶元六年を去ること九十餘年前なり、其の間彼我交通なきにあらで、日宋往來は依然として繼續せしが、故に、周張二程の書も亦我に入るなきを保せず、況や近衛帝の仁平元年なる南宋の高宗紹興二十一年には、宋人書籍を進送せしこと百鍊抄に見ゆるをや、論語東來の明文は應神紀に見ゆれども、經籍の我に入りしや久しからんとの説ある如く、周張程朱の書も、亦一時に俊仍に因て齎し來りしにはあらで、其の人の時代に隨つて舶載せしなるべく、濂溪の太極圖說の如きは、蓋し尤も早く渡來せしならん、俊仍以前の日宋交通は、平氏執政の比に最も盛と爲り、南都大佛勸進の俊乗坊重源、並に覺阿和尚の入宋を初め、禪宗の開祖なる榮西禪師は、西天八塔を禮せんと欲し、諸宗血脈西域方誌を携へて支那に再渡せしも、旅券を得ずして、入竺を果さず、歸朝して聖福寺を博多なる宋人百塔建立の遺跡に創建せり、時に平重盛は沙金を育王山に送り、宋の明州刺史は方物を貢し、宋の佛工來朝する等、往來相踵

ぎ、頼朝の時、宋國の請に依りて處罰を議したりし船頭楊榮陳七太二人の内、楊榮は日本に生れし者なる由見えれば、雜種兒にやありけん、當時如何に宰府邊には數多の支那人來住し居たるかを想見するに足れり、是れ實に程子の死を去ること己に久しく、朱子の集註も亦己に成りし時なり。

清原頼業
と學庸

當時唯一の學者たる清原頼業(高倉帝侍讀文治五年卒年六十八)が禮記中より大學中庸を表出して進講せりとの説は、承應遺事に、近き比の造言なり、一己の私にて世を欺くは、禁止すべしと仰ありけり」と見えたるが、康富記享徳三年二月十八日に頼業の奥書ある中庸を見て、「朱熹新註未渡來時節也、自然相叶道理奇特之至也」と記せば、進講こそ造言なんめれど、頼業が學庸を尊崇せしは事實なるべく、而して後人程子の卓見と暗合せりと爲すも、或は此の時己に程子の説を傳へしにあらざるか、後人妄に先賢の美を傷く可からず、此の言果して暗合なりと爲すも、俊仍以前宋儒の書を齎來せし者なしと爲すを得じ、然れども是も亦予の臆測にして、證據なきを憾むのみ。

潜隱の俊仍説は、儒書を齎せし史證あるも、儒書中に四書ありけん、と爲すは、亦臆

一、...
 二、...
 三、...
 四、...
 五、...

歐陽修東坡志林 歐筆爾爾四辨

一、...
 二、...
 三、...
 四、...
 五、...

歐陽修東坡志林 歐筆爾爾一山一

俊仍の四書は尙早

實朝渡宋の計畫 道元の入宋

辨圓の略傳

測に過ぎず、且四書刊行の歳に四書の類を齎しけんと言ふに至りては、頗る尙早の感あり、而して其が俊仍以後の宋學傳來を説くに、臨濟禪の祖なる聖一國師及び宋僧道隆の二人を略して、重を元僧祖元一山の二人に置きしは、如何にぞや。

二、聖一國師 大明錄三教要略

俊仍時代より日宋往來は益發達し、鎌倉將軍實朝の如きすら渡宋の志を抱き、歸化人陳和卿をして大船を作らしめしことあり、僧徒には曹洞禪の祖なる道元先づ宋に入り、臨濟禪の祖なる辨圓尋ぎて彼に至り、求法傳智の外に文物工藝を齎來せしが、後に聖一國師と謚せられし辨圓こそ、宋學をも傳へし人なるべしと思はるれ。

辨圓字は圓爾、峻河國葦科の人、建仁二年に生れ、早歲久能山の堯辨に従つて出家し、十九には都に出で、孔老の教を聽き、俊仍入寂後八年なる嘉禎元年には、年三十四にして入宋を思ひ立ち、四月肥前の平戸より船出して、十日目には宋國明州に着しけり、在宋六年許りにして、四十歳の仁治二年に歸朝し、筑前博多に崇福承

◎宋學傳來者

大明錄と程明道

天二寺を草創し、歸洛して藤原道家に崇信せられ、東福寺を立て、其の開山たり、七十九歳の弘安三年に化しき、傳説に云く、辨圓歸朝に臨み、其師徑山の佛鑑禪師は大明錄を付與して、宗門の大事此の書に備はれりと云へりと、聖一國師年譜を案するに、北條時頼、最明寺殿師に請ふて相州に入り、大明錄を講せしめしは正嘉元年の事なり、此の大明錄は宋僧圭堂といふものゝ作にて、或は云く匿名、中に程明道の説をも擧げたれば、程子理學の一斑は、此の時己に鎌倉に講せられたりとや云はん、虎關師鍊は痛く大明錄の妄を駁し、佛鑑付與の無根を辨せしも、年譜の明文、豈根據なからんや、且辨圓は少きより儒老に通せし人なりければ、年譜文永五年師年六十七の條に、堀河大相國源基貞、儒佛老三教の大意を辨圓に問ひしより、三教要略を述べて之を呈したりとあり、又建治元年師年七十四、龜山法皇に謁して、三教の旨趣を説けりとも見え、入寂の年には、自ら三教典籍を造りて、普門の書庫に置くとあり、辨圓の儒學と關係ある此如くなれば、宋儒の學を齋來せざることもやある、當時儒宗と仰がれし菅原爲時(參議)、竊に儒學の形勢日に非なるを慨き、辨圓と一論戦せんことを思ひしが、一日莊嚴藏院に相會せり、辨圓は我が法は

三教要略の著

三教典籍

菅原爲時と辨圓

宋學齋來の一人

佛々相授け、祖々相傳へ、世尊より某に至るまで五十五世なるが、儒門とても同じ例なるべし、公は孔子より幾世なりやと問ひ、菅公口を箝して退かれきと年譜に見ゆ、是れ蓋し彼の土の佛徒が儒者と折衝する慣用手段を借りし者にして、宋儒が佛者に對抗せん爲に、韓退之の説に本つき、彼の血脈に對して道統を説きし所以も亦知るべし、當時猶家業秘傳を墨守せる我邦の死學者は、斯る愚問をも得も説破せざりけん、辨圓の狡猾惡むべしと雖も、當時の儒者と佛徒との段違なりしを知るに餘あり、辨圓の三教要略と三教典籍(書目か)とは、予れ之を求めて得ず、其の内容を詳にせざるを深憾と爲せども、程子の學説をも引きたる大明錄を講せし事とも思合すれば、宋學齋來の一人として疑ひを存するに足れり。

三、宋元僧の歸化と游宋入元の諸師

僧道隆は宋學の一開祖か

厥後宋元の名僧楨を浮べて東來する者相踵げり、曰く蘭溪道隆、曰く兀菴普寧、曰く大休正念、曰く無學祖元、曰く鏡堂覺圓(以上宋末)、曰く一山一寧、曰く石梁仁恭、曰

◎宋學傳來者

歸化の宋
元僧

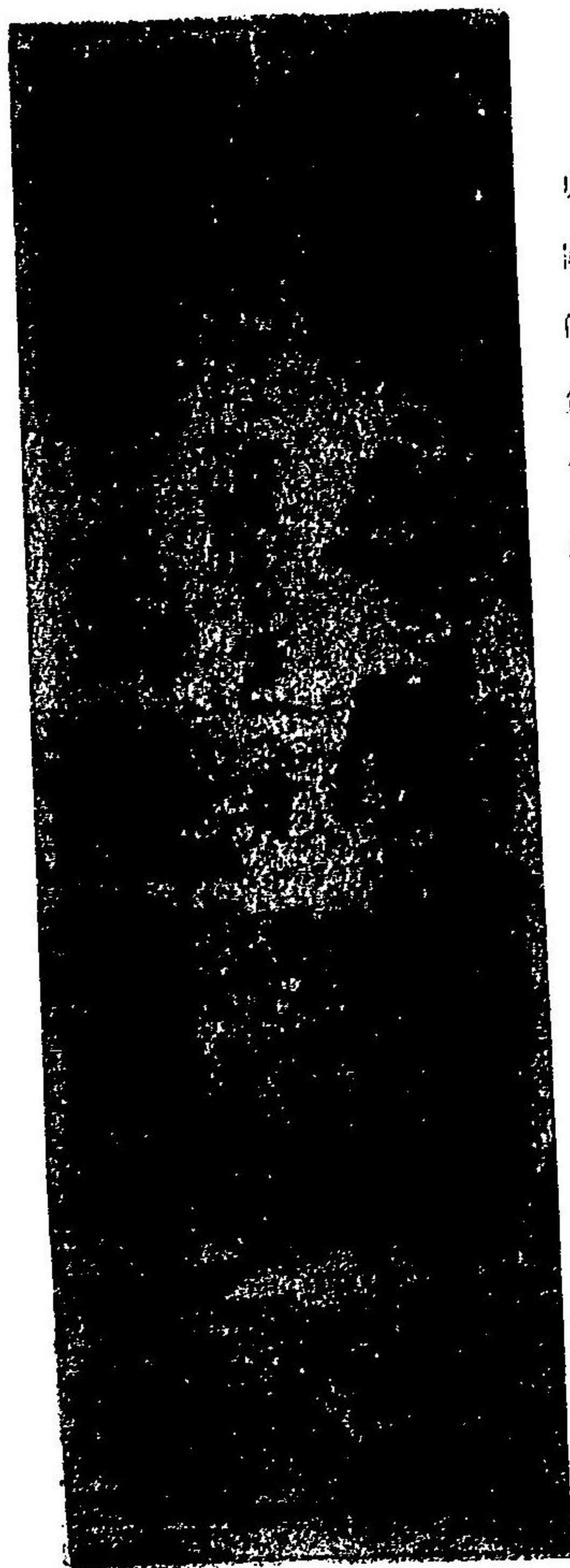
く東里弘會曰く東明慧日曰く靈山道隱曰く明極楚俊曰く清拙正澄曰く竺仙梵
仙曰く東陵永興以上元初總て十五人の内、東明以上十人は花園帝以前の歸化に
して、靈山以下五人は後醍醐帝以後の歸化なり、後醍醐の經筵に新註を用ひし史
證ある以上は、新註の傳來や花園朝以前に在ること明かなるを以て、東明以上十
人の歸化僧は、尤も注目すべきものたり、而して其の魁を隆蘭溪と爲す。

道隆の歸
化

道隆は蜀人、號は蘭溪、諡は大覺禪師と曰ふ、禪師號の始とかや、初め入宋の日本僧
より日本の事情を聞き、遊行化導の志を起し、商船に附載して我邦に歸化せし
は、寛元四年にして、辨圓歸朝後六年なり、北條時頼爲に建長寺を創立し、道隆をし
て開山說法せしむ、後ち建仁に居り、尋ぎて甲州に配流せられ、赦されて鎌倉の壽
福寺に住し、弘安元年建長寺に化せり、道隆の大覺禪師語録を讀むに、居然たる儒
僧の語氣あり。

儒僧の語
氣

大病の源は、盡く情を恣にして而して起るに在り、萬行の本は、己を修めて而
して明なるに非ざる無し、己れ修らざれば、則ち行廉ならず、情若し恣なれば
則病愈盛なり。



皮
圖
飾
銀
筆
質

筆
質
銀
飾
皮



圖
後
道
隆
諸
像

隆
諸
道
後
像

正心誠意

參學は猫の鼠を捕ふるが如し、先づ身を正して直視し然る後他の緊要處に向つて、一咬咬定し、作走する無らしむ、道を究め玄に參するも、亦復如是し、首め其の心を正し其の意を誠にし、目は邪視せず、口は亂談せず云々。

道固より遠きに非ず、之を窮むるは人に在り。

従上の諸聖皆自ら諸を己に反求して、不疑の地に至る、且己に反るとは何ぞ、一切處十二時に於て、一々自己の上より反覆推窮す云々。

是れ皆聖人克己復禮の學にして、宋儒省察の工夫なり、特に大學の正心誠意を説くに至りては、嘗て其の心を理學に潜めしや疑ひなし、隆や我邦宋學の一開祖に非ざるなきか。

宋學の一開祖

元菴の備

元菴も亦蜀人、固り道隆と友たり、隆の歸化後十四年なる文應元年に來朝し、居ること五六年にして、文永二年には歸宋せしが、元菴語錄(寫本一冊)に、儒教も亦云く、君子本を務む、本立ちて而して道生ずと、此の本は即ち是れ自己の本命元辰、本來面目など云へるありて、儒釋不二を説けり、元菴歸宋後四年なる文永六年に歸化して、建長壽福圓覺等に歷住し、正應二年の冬七十五にて示寂せし大休温州人に

大休の理

至りては、蓋し理學を好みし人なり、大休録寫本四冊に三教圖の偈頌あり、儒に居仁由義、窮理盡性、清淨自然、彼々窮竟、正眼觀來、分毫總毛病と云ひ、老に文行忠信、常樂我淨、清虛無爲、各正性命、三足鼎分、分乾坤泰定と云へり、窮理盡性及び性命等の字面は、易中庸に出で、而して宋學の根底する所たり、大休の此の語、以て其の理學中の人たるを證す可からずや、西澗子曇は大休歸化の翌年に來朝せしも、弘安元年に歸國せり、以上は辨圓道隆の二師の在世中に東渡せし人々なり、而して我れ禮を以て聘請せしは祖元に始まる。

無學祖元

無學祖元、字は子元、會稽の人、宋末の難を鴈峰に避けしに、元兵忽ち至りて、白刃頸に交りし時、堅坐動かす、乾坤無地、卓孤筇、且喜人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裡斬春風の偈を唱へければ、元兵禮を作して去れりといふ程の名僧とて、弘安二年北條時宗の聘に應せしは、元の粟を食まざる意もありけん、六十一の弘安九年に寂して、佛光禪師と教諭せらる、佛光語錄、寬永活版七冊中には、儒宗の口吻多し、同時東渡せし鏡堂覺圓の鏡堂錄寫本二冊には、此ぞと思ふ節なし。

一山の該

一山一寧は元主の密命を帯びて來朝せるも、我れ其の脅從に出づるを知りて建

一山の該

長に主たらしめしが、其の來朝は正安元年にして、祖元歸化に後るゝこと二十年なり、一山國師語錄（版本二冊）に孔子の頌あり（學爲萬世所師、道由一貫而傳也、知三千子弟、尙泥六籍陳言）、高僧傳に一山は釋典諸部、儒道百家、稗官小説にも通じたりと見ゆれば、天晴の學僧なり、陸前松島の御島に、一山が自撰自書自刻の賴賢碑あり、書法鐫法、並に迥美超妙を極め、文も亦雅淡誦すべきは、松崎懷堂安井息軒の諸儒之を稱せり、漢學紀源は元の揭傒斯が作りし祖元塔銘に、孔釋並隆、無遠不至の句あると、虎關が儒釋を一山に質問せしとの二者に據りて、宋學を我邦に唱へけんと爲し、重を二人に置けり、今人も亦一山歸化の年を以て四書傳來の始と斷する者あり、然れども前に辨圓道隆あり、後に兀菴大休あり、祖元一山固より宋學盛行の日に東渡せし人として、宋學研究に大關係あるを疑はざるも、蓋し宋學齋來の祖鞭に非ず、當時一山は其の姪なる石梁仁恭、及び前年歸國せし西澗子曇をも同伴せしが、子曇は畫を能くし、石梁は梵語に通じたりき、東里弘會の東渡は、其の後九年を経たる延慶元年にして、東明慧日は其の翌二年に來りしも、蓋し皆研究時代の人にして、齋來時代を去ること遠し。

游宋入元の諸僧

既に歸化の宋元僧を擧ぐ、亦我が游宋入元の諸師を忽略す可からず、辨圓入宋後花園帝以前の求法僧は、大略左の如し。

嘉禎中、道祐、榮尊 ▲寛元中、一翁院蒙、悟空、敬念 ▲建長中、心地覺心、無衆靜照、巖、義尹、直翁、智侃、無關、普門、樵谷、惟曲 ▲正嘉二年、山叟、慧雲 ▲弘長二年、藏山、順空 ▲文永前後、無外、耐然、南洲、宏海、寂菴、上昭、白雲、慧曉、南浦、紹明、慧雲、約翁、德儉、桃溪、德悟、(以上入宋)

弘安比、無雲、義天 ▲永仁中、可菴、圓慧、見山、崇喜、愚直、師侃、無著、良緣 ▲嘉元中、無清、一清、龍山、德見 ▲德治中、雪村、友梅 ▲延慶中、嵩山、居中、復菴、宗己、無隱、元晦 ▲應長中、平田、慈均、孤峰、覺明 ▲文保中、可翁、宗然、印元、古先、齊哲、石室、善致、(以上入元)

宋元僧は御座教師は游宋入元は歐米留學生の如し

年代の詳ならざる者、及び僧史の載せざる者、想ふに枚擧に暇あらざらん、蓋し鎌倉の中葉より末造にかけての歸化僧は、猶維新後の御座教師の如く、游宋入元の諸師は、猶歐米留學生の如し、二者の争ふて新學説を傳へて以て歐米の文化を輸入せしが如く、歸化僧も游宋入元僧も、皆其の時代に行はれし程朱の新學説を輸入せしを疑はず、但本色の禪僧は、不立文字を宗とするが爲に、著作の世に傳ふる者少く、白雲、南浦、龍山、雪村諸師の語録は、大略之を涉獵せしも、儒を借りて、談資と爲すに過ぎずして、史證と爲すべき者を見ず、豈學界の深憾に非ずや、然れども游宋入元の諸師、率皆辨圓道隆の徒にして、辨圓道隆には宋學齋來の痕迹あること如此し、是に於て予の結論に曰く、宋儒の書の傳來は、其時代に隨つて、俊仍前後、數回に分渡せし者にして、宋學齋來に關する史證の斷片を有する者は、辨圓道隆の二僧なりと、果して然らば、則茅原虛齋の茅窓漫錄に引ける、日野弘資の正嘉中に宋學傳來せりとの説、柴野栗山が程朱の書來貢正元中に在りとの説、南山編年録の元應元年に四書舶來せりとの説の如き、皆未だ史實を得ざるに似たり、但上記の各年代にも、往々四書を舶載したりけん、當時の人從前已に之あるを知らずして、舶載を見る毎に、此時や始なるべきと思ひけん、其説轉傳して後世の紛々聚訟を致せしなるべし、而して新井白石の退私録に引ける、木下錦里談話の金澤文庫に朱子の小學ありきと云へる者、亦左もあるべき事實ならん、宋學傳來の淵源や如此く久し、後醍醐朝に至りては、已に研究時代に入れるも亦宜ならずや。

宋儒の書は數回分來

四書傳來の諸説

附 載

大覺禪師語錄 道隆蘭溪

道在日用

物逐人興。道在日用。且如日用中是甚道人興者。是何物。動靜俯仰之間。色聲語嘿之際。非道不親。惟人自味道。若不味。物隨人而自興。豈不聞趙州和尚云。諸人被十二時使。老僧使得十二時。灼然體察。得明達絕疑慮之境。天地開闢。即我開闢。陰陽慘舒。即我慘舒。無一法從他處得來。無一物不是自心默運。天地無物也。我無物也。未嘗無物。聖人得這箇妙理。能為二儀之首。萬物之主。

道在屎尿。道在瓦礫。

窮道在人

道固非遠。窮之在人。惟患人之不能一往直前。所以對面有千里之遙。舉止被萬緣所隔。苟或信而不疑。行之不倦。時來緣熟。道無有不通之理。心無有不明之時。道已通達。心亦明白了。居聲色之場。不被聲色所轉。入是非之域。不逐是非所迷。到此境界。謂之大自在人。謂之出塵羅漢。然後隨世流布。亦得不隨世流布。亦得應物副機。更無別法。如上密用。本自信心中流出。若談此事。擬思量則羞。繞分別則遠。不思量。

返求體己

不分別。且此道如何得入頭。如何得明白。須是自肯承當。直下體取。始得。從上諸聖。皆自返求。體己。而至於不疑之地。且返己者。何於一切處。十二時。一一從自己上。返覆推窮。如大覺世尊楞嚴會上。為阿難七處徵心。相似徵之。至無可奈何處。待伊思量盡。分別亡。識得其心所在了。世尊與一喝。及至阿難瞿然避坐處。方可與他腦後。錘。教他盡底掃除。蕩然無礙。

武家文教
の淵源

武家の
宗を歓迎
する所以

(四) 北條氏の文教

武家と禪 〓 禪と宋學 〓 宋學と武家 ▲ 金澤文庫

予の所見にして謬らすんば、宋學傳來の淵源は、鎌倉時代の中葉に在りて、北條氏の盛時に當れり、而して北條氏の文學上の偉勳は、亦注目す可き者あり、且つ後世武家の文教は此に淵源す、其の人文の進歩に資すること大なり。

宋學は禪宗と共に傳來せり、禪宗は武家に因つて行はれたり、皇家も亦固より禪を信じ、禪師號國師號の勅賜に出でしは勿論なれど、其の根本を尋ぬるに、鎌倉の二代將軍頼家が明菴榮西の爲に建仁寺を創建せしに始まり、實朝も亦明菴の爲に壽福寺を創し、北條氏執權の天下と爲りては、泰時の賢を以して明菴に參したる行勇和尚の爲に、淨妙東勝の二刹を創し、時頼は初め辨圓に參し、尋ぎて道隆の爲に建長大道場を立て、開堂說法せしめ、又兀菴普寧に參して印可を得、贈從一位時宗は無學祖元の爲に圓覺寺を創し、其の後世々相承けて禪を崇びしかば、諸國の武家も亦多く之に倣ひて、以て禪宗の盛なるを致しき、願ふに武家の佛を

好むは源平以來の慣習なるが、是れ蓋し多殺の報を消滅せんとするに在り、而して禪宗の我邦に入るに及びて、先づ武家に歡迎せられしは、禪が尤も武家に適したればなり、蓋し禪は不立文字直指人心を以て宗と爲し、教學を借らずして日鍛月鍊し、一棒一喝の下、直に人心を指して、以心傳心の中に見性成佛し、通身汗流れて生死を超越するが如き、直截銳利、簡明痛快なるは、他宗の及ぶ所に非ず、武人の不文は、古よりして而して然り、不文なる武人に投ずるに不立文字直指單傳を以ず、誰か之を喜ばざらん、生を愛して死を惡むは、人の情なり、而も武人は矢石の間に驅馳して生死の門に出入せざるを得ず、今禪は出塵羅漢の境に入て、生死の外に大自在たらしむと稱す、誰か之を樂まざらん、禪の武家に歡迎せられし所以なり、道隆は時頼に謂て曰く、

武人不立文字

時頼と道隆

天下の大事は、剛大の氣に非ざれば、以て之に當るに足らず、佛祖の一大事、因縁を明にせんと要せば、須らく是れ剛大の氣始て承當すべし、今尊官教化を興し、社稷を安んじ、干戈を息め、海宇を清む、此れ剛大の氣を以て千載の昇平を定めざる莫し、世間の法既に能く明徹ならば、則出世間の法は、二なく異なる

剛大の氣

し云々(大覺禪師語錄)

最明寺殿の世を棄てながら世を憂へて、以て治平を致し、は、此の法語に基くなきか、剛大の氣は、是れ孟子の浩然の氣なり、至大至剛の氣を尙ぶは、實に儒釋一致なり、武士道の根本なり、元菴又曰く、

元菴の豫言

大人は大見を具へ、大智は大用を得、胸に六合を藏め、掌に乾坤を握り、碧油の床に坐し、忍辱の鎧を被り、堅固の箭を執り、智慧の弓を乗り、大千世界を總べて一戰場と爲し、百億須彌を指して一射梁と爲し、百發百中、雙放雙收、百萬の妖魔を掃除し、歩多の惡黨を勦絶せば、便ち時清く、道泰く、海晏く、河清く、八表仁に歸し、萬邦入貢し、轡を頓めて自ら樂み、坐鎮して憂なきを見ん、我れ法王に於て法自在を得と謂ふべし、正に恁麼き時、且つ道へ功は何の所に歸する

と、良久しくして云く、寸刃不施、魔膽碎、望風先已、堅降旗、(元菴語錄)

人を見て法を説くに巧なりと謂ふべし、元菴は弘安元寇より十七年前に歸宋し、歸宋後三年目に元使始めて來れり、今此の語を見るに、殆ど弘安の元寇を豫言する者に似たり、日蓮の立正安國論は、後ちに日蓮自ら元寇を豫言せし者と爲せる

時宗と祖元

か、彼は大亂將に至らんとするを説き、此は大亂を剿平するを説く、豈亦奇ならずや、後年歸化せし無學祖元は時宗を迫り嘆美して曰く、

人生百歳七十の者は稀なり、法光寺殿は齒四十に満たずして、功業を成就せしこと、七十歳の人の上に在り、看る他の國を治め天下を平定するに、喜怒の色あるを見ず、矜誇衒耀の氣象あるを見ず、此れ天下の人傑なり、弘安四年虜兵百萬博多に在りしが如き、略意を経ず、但毎月老僧と諸僧とを請ふて下語し、法喜禪悅を以て自ら樂みしが、後ち果して佛天響應して、家國貼然たり、奇なる哉、此の力量ある、此も亦佛法中再來の人なり、(佛光語録)

時宗の風采

古今無雙の名將

弘安四年の元寇は、時宗三十一の時にして、其の卒せしは同七年、三十四の時なり、年壯氣銳の時宗が、大權を握りて喜怒色に見さず、功業ありて矜誇衒耀せず、大敵に臨みて晏如たりしは、眞に是れ天下の人傑、古今無雙の名將と謂ふ可し、此の大力量ありてこそ元寇を撃退して國威を奮揚するを得けれ、若世に絶大なる文士ありて時宗劇を作り、絶妙なる名優ありて其の大難の際に優游迫らざる態度を演じたらんには、如何に面白かるべき、抑此の大力量は何の處よりか得來れる、豈

北條氏の家風

禪と儒とにあらざるか、尊儒好學は北條氏の家風なり、當時の禪と儒との關係に徴して之を知るべし。

禪の見性
と宋學の性理

禪僧の儒教觀は、明教の輔教編に基きて儒釋不二なり、世法は尊んで調和を儒に求むるは各宗皆同じきも、禪の宋學に於けるは、尤も密接なる者あり、蓋し禪宗は見性成佛を主とし、宋學は窮理盡性を宗とし、禪宗の性相と宋學の性理と相似たり、禪は自己の本源に復り、宋學は自己の本心を求め、坐禪と靜坐省察の工夫、頓悟と豁然貫通の大悟等、殆ど一轍に出で、而して其の制欲主義を執れるも亦相同じ、是れ禪僧の宋學を好む所以なり、(宋學は禪理に出づと謂ふ、其れ或は然らん、今予は宋學を主とし、禪學を客として言を立つ、)武家は禪を喜び、禪は宋學を好めるより、宋學は又禪宗に伴ふて武家の時代に入來れり、北條氏の時に於ける宋學の發現は、猶未だ朦朧を免れざるも、其の斷片は禪僧の語録に班々乎とし、以て後醍醐朝の宋學研究時期を開けり、其の傳來の痕迹は草蛇灰線の如し、當時の禪僧は、禪宗弘布を主とせしが故に宋學の説を大聲せざりしと雖も、頗る宋學に通ずる者ありしを疑はず、而して其の武家に説ける儒語は、亦能く禪要と共に其の修養

禪僧の宋學を好む所以

高僧の傳

に資せしや大ならん、其の法語中に儒語を交ゆるは、談資に過ぎざるが如きも、檀那の小佛事等には殆ど忠孝仁義等の字なきは莫し、試みに當時二三高僧の語録より儒語を摘録せん。

大休正念曰、事君盡忠、事親盡孝、莅政以公、將兵以信、撫民及接物、一視而同仁、森羅及萬象、一法之所印。(大休錄)

高峰顯日曰、不分世法佛法、直下打成。若能如是、則居忠孝仁義源、現宰官身、合元亨利貞德、輔君撫民、終日作爲圓湛虛凝體、不動終宵寂默、展縮殺活用不廢。(佛國國師語錄)

南浦紹明曰、一莖草上、現法王刹、一微塵裏、轉大法輪、一切處建立、一切處成就、頭々合轍處々逢原、正恁麼時、且道承誰恩、卓拄杖云、皇天無親、惟德是輔。(大應錄)

鐵菴道生曰、以德行仁者王、以力假仁者霸、天上天下獨稱尊何也、魏阿無真、水銀無假。(語錄)

梵仙竺仙天源菴記曰、先王所尊、莫大於孝云々。(天柱集)

如此の類を挙げば、殆ど更僕に暇あらず、以て當時の武人は禪僧に因て儒と禪と

を併受せしを知るべし、而して其の時好を開きし者は北條氏なり、北條氏は猶一の國寶を積み、何ぞや、金澤文庫是なり。

金澤文庫

鎌倉の京學輸入

仲章の書籍集

北條實時の藏書

金澤文庫に就ては、先賢哲考あり記あり、世人熟知す、必ずしも絮説せず、今其の要を記さんに、北條氏世々學を好み、經傳を尊崇せしが、義時の孫にして泰時の弟實泰の子なる越後守實時家法を紹きて文學を好み、由來鎌倉の文學は、大江廣元、三好康信を初め、京都より來れる儒生に因て開かれ、藤原氏及び親王家を奉じて將軍と爲すに及びて、益京學を輸入せしが、實時も宗尊親王に隨從して鎌倉に在りし清原教隆を師として、其の學大に進めりと云ふ、東鑑の元久元年正月十二日實朝讀書始の條に、侍讀たりし相摸守仲章を評して、此人依無殊文章、雖無才名之譽、好集書籍、詳通百家九流云々とあり、書籍蒐集の風尚は、已に實朝の時に在り、實時も亦常に心を古書蒐集に盡し、摺紳佛刹の舊藏を搜訪鈔寫し、且日宋往來の頻繁なる時なりしかば、多く舶來の宋本を購蓄し、其の孫顯時も亦其の志を繼ぎ、藏書いよゝ富むに及びて、文庫を武州金澤に立てたり、是れ所謂金澤文庫にして、其の地を文庫ヶ谷と云ひ、顯時は實時の爲に稱名寺を其傍に立てたりき、文庫

孔廟に從
祀するし
可なり

金澤文庫
の小學

創立の年月は明かならざるも、實時の末年にもやあらん、顯時の子は貞顯、貞顯の子は貞將、貞將に至りて北條氏亡びたれども、文庫は儼存して、好文の士、篤學の僧、往々其秘を窺ふを得けるが、其文庫廢して典籍散せしは慶長中なるが如し、文庫廢すと雖も、典籍は散して天下に在り、學者をして古鈔古板を見るを得せしむ、近藤正齋曰く、金澤氏は典籍に大功あり、之を異邦に求めば、孔廟に從祀すと雖も可也、此の言決して過當と爲さず、木下錦里が、朱子小學の書を撰せられしより七十年ほど後の事なりしが、相州金澤にて、越後守顯時八十以後の奥書を書きし寫本の、文庫より出でし小學の本を見侍りぬ」と物語りしこと、新井白石の退私録に見えたるが、顯時は四十五を以て正安三年に卒したれば、七十年後と云ひ、八十以後と云ふは誤れるも、金澤文庫に小學ありしと云ふことは信すべしと、正齋の言へりしは、亦我意を獲たり。

北條氏專横の罪は、先賢錄を攢めて之を誅し、九代の屍、殆んど完膚なし、而して頼山陽又其の修禪を論じて、北條氏の悖逆に安んずる所以の者は、盡く禪教の致す所なりと爲せる、殆んど酷吏の文を舞はすが如し、是れ豈公論ならんや、南朝の忠

北條氏の
文勳

臣親房、猶且つ泰時の功を稱せり、時頼の政治、時宗の武勳、並に國家に功あり、而して其の文學上の偉勳や、亦上述の如し、明治の奎運は、徳川氏の文化に胚胎し、徳川氏の文化は、足利氏の潛養に根抵し、足利氏は、淵源を北條氏に發す、其の功、其罪を償ふに足れり、後人は其幽光を發する所以を思はざる可からず。

附 載

兀菴錄 兀菴普寧

兀菴印可
北條氏時
頼に與ふ

壬戌(弘長二年)十月十六朝、最明啓問曰、弟子近日坐禪、見得非斷非常底、師云、參禪只圖見性、方得千了百當、最明曰、和尚方便指示、師云、天下無二道、聖人無兩心、若識得聖人之心、即是自己本源、自性、最明曰、弟子道崇無心、師云、若真個無心、豈窮三際、橫遍十方、指燭云、譬如蠟燭、未燒成以前、即是本地風光、本來面目、及至燒成、點灑輝耀、雅觀照徹、冥暗入々、瞻望未後、燭盡光極、依舊如前消息、佛出世度人、亦復如是、未出世以前、淨法界身、本無出沒、以大悲願力、示現出世成道、隨上中下根機、演說三乘十二分教、拈花示衆、爲令聖凡人天大衆、明心見性、未後入無餘涅

槃亦如一條蠟燭。無二無別。萬古流通。直至今日。若見此性。直下即見也。良久云。見麼。最明曰。森羅萬象。山河大地。與自己無二無別。師云。青々翠竹。盡是真如。鬱々黃花。無非般若。最明言下。忽然契悟。通身汗流。乃曰。弟子二十一年。且暮望。今一時已滿足。感淚數行。作禮九拜。師即起。佛前燒香。與之印可。

印可後。贈助道頌五首。其一曰。治國治民俱外事。存心存念自工夫。心思路絕畧觀看。佛也無兮法也無。以上兀菴錄。

大應錄 南浦紹明

和蒙古國信使趙宣撫韻二首

遠公不出虎溪意。非是淵明誰賞音。欲話箇中消息子。蒲輪何日到雲林。

外國高人來日本。相逢談笑露真機。殊方異域無老路。目擊道存更有誰。

元使と南浦紹明との唱和



後醍醐天皇御影
京都大徳寺行藏
(大正三年)

(五) 宋學研究の嚆矢

一、後醍醐の經筵

宋儒の書は日宋交通に因て我國に入り、辨圓道隆の輩に至りて、其の學說の世に閃めくこと、螢火の明滅するが如く、彼我禪僧の往來益繁きに及んで、宋學を齎來すること漸く盛に、花園天皇の御代は己に宋學研究の時期に入り、後醍醐天皇の朝には、玄惠を經筵に召して新註を進講せしめたまふに至れり、花園院御記に云く。

花園院御記

宋學の好

玄惠の達

禁裏の風
宋朝の義

元應元年閏七月四日丙戌、入夜資朝參、召前談道、頗所得道之大體者也。好學己七八年、兩三年之間、頗得道之大意、而與諸人談、未稱旨、今始逢知意、終夜必談之。至曉鐘不怠倦。○廿二日甲辰、今夜資朝公時等、於御堂殿上局談論、語僧等濟々交之、朕竊立聞之。玄惠僧都義誠、達道歟、自餘人皆談義勢、悉叶理致。

元亨二年七月廿五日癸亥、談尙書、人數同先、其義不能具記、行親義、其意涉佛教、其詞似禪家、近日禁裏之風也、即是宋朝之義也、或有不可取事、於大體非無其

儒教と政
道中興

論孟學庸

隱士放游
の風

尺素往來

玄惠の程
朱進講

謂者也。凡近代儒風衰微、但以文華風月爲先、不知其實、文之弊、以質可救之、然者、近日禁裏有此義歎、尤可然事也、但涉佛教、猶不可然乎。

元亨三年七月十九日己酉、凡近日朝臣、多以儒教立身、尤可然、政道之中、興又因、茲歎、而上下合體所被立之道、是近代中絶之故、都無知實儀、只依周易論孟大學、中庸立義、無口傳之間、而々立自己之風、依是或有難謗等歎、然而於大體者、豈有、疑殆乎、但近日風體、以理學爲先、不拘禮義之間、頗有隱士放游之風、於朝臣者、不可然歎、此是則近日之弊也、君子可慎之、況至于道之玄微、有未盡耳、君子深可知之。

一條禪閣兼良の尺素往來に云く、
近代獨清軒玄惠法印、宋朝濂洛之義爲正、開講席於朝廷以來、程朱二公之新釋、可爲肝心候也、次紀傳者、史記并兩漢書三國史晉書唐書及十七代史等、南式菅江之數家、被傳其說乎、是又當時付玄惠之儀、資治宋朝通鑑、人々傳受之、特北島入道准后、被得蘊奧云々。

按するに大樞武門に歸して、王室式微し、承久の亂後は、北條氏陪臣を以て大統を

兩統交立
の文藝論

儒臣擢用

奕置する者數十年、是に於て皇統は大覺寺統持明院統の二派に分れ、後嵯峨の遺詔に、皇位は龜山(大覺寺派)に、長講堂領は後深草(持明院派)に傳ふべしとありて、南北六十年の爭亂此に起りしが、識者は兩派對抗の結果として利益ありしは、文學の競争なりきと云へり、國史眼、大覺寺統の龜山天皇は、學を好みて材藝多く、遂に不平の爲に禪に逃れて、無關普門を崇信し、達磨忌の偈に和して、當時若得親相見、不在魏梁庸主問の句あり、敵國降伏の宸額は、今も光を四海に放てり、其の子後宇多天皇の文學は、後三條帝に亞くと稱せらる、亦元僧一山に禪要を問ふて、渴仰いと深かりしは、胸中の拂鬱を遣る所以なりけん、其の長子後二條は、早く崩せられしも、文學を好みて群書治要を進講せしめられしが、後宇多の二子なる後醍醐帝に至りては、専ら儒學を尊崇し、日野俊光五條良枝等文學の臣を不次に拔擢せられ、俊光の子資朝等も其の寵任する所たり、花園院御記に、近日朝臣多く儒教を以て身を立つとある者、是なり、持明院統も亦世々文學を好まれしが、花園上皇は、日野種範を師として、詩歌を善くせられたりき、資朝參上して、共に大道を談じ、意見相合して、曉鐘に至るも怠倦せずとあるほどなれば、其の好學推して知るべし、資

朝は儒家に生れて、家學素ありけん、而して玄惠と同じく宋學を講じたるを見れば、其七八年前より學を好み、兩三年の間に大意を得たりとある者は、蓋し亦程朱の學なり、元應元年より七八年前は、花園朝の應長正和の比にして、一山來朝後十三四年なり、上皇が殿上に於ける論語の談義を立聞ありしと云へる者、是れ後醍醐帝の御前講なるべし、日野資朝菅原公時等の儒家を初め、僧徒も濟々立交りたりとあれば、此の比は已に宋學を尊信せし僧徒も尠からざりけん、中にも玄惠の講義は誠に達道なりと贊せられ、其の餘の人々も理致に叶へりとなれば、新註の義理略明なりけん、と察せらる、而して此は後醍醐帝即位の翌年にして、經筵の史證こそ始めて此の年に見えたれ、帝が玄惠資朝等と宋學を講せられしは、蓋し此の年に始まらずして、資朝嚮學の七八年前と同じく、帝の東宮におはしまし、比よりの事ならん、論孟大學中庸の字、即ち四書の打揃へる記載、及び理學の名目も、亦始めて元亨三年の御記に見えたれど、四書の資朝玄惠等の手に入りしは、其の以前なるべきは勿論なり。

二、建武中興と宋學

後醍醐帝は非常の英主なり、神皇正統記は、中比よりの代々にはこへさせましましける」と云ひ、太平記は延喜天曆より以來先帝程の聖主なしと云へる程の名君なれば、前代諸帝が武臣の專横に堪へずして、世を厭ひ禪を弄びしが如きは、帝の屑しとせざる所なるのみならず、夙に北條氏を誅滅して大權を恢復せんことを思ひたまへり、而して儒臣を擢用して學問を奨励せられしは、讀書人に非ざれば大義名分を辨せずして、與に大事を謀るに足らずとの叔慮に出でしなるべし、然ればこそ花園上皇も、朝臣の儒を以て身を立つるを尤然るべしと爲し、政道の中興又茲に因れりとは宣ひけめ、然れども當時儒教の衰や甚だしく、釋典あるも告朔の餼羊に過ぎずして、大學寮の十哲像も盜賊に盜まれ、文學の臣は彼の御記にも見ゆる如く、文華風月を先と爲して、儒學の實を知らず、此の時に當りて帝は世に宋儒道義の學あるを知り、浮文の弊を救はんとせば、道學の質を以せざる可からずと爲し、扱こそ宋學に通せし玄惠等を経筵には召されしならめとは、御記の

延天以來
の聖主

宋學を
經に用ひ
られし所
以

群學派の
批難

花園院の
明眼卓識

文に徴して推測らる、然れども當時の宋學は佛徒に因て傳へられ、佛徒に因て講明されしより、其の談義は自から佛教を交へけん、又性理の説の如き、自から禪家の性相を説くにも似通ひけん、本註派の訓詁とは、覺然趣を異にせしと、傳來日淺くして見解一ならざるとより、世評紛々として起り、且舊學を墨守せる儒家の批難譏謗も亦随つて生じけん、當時の情勢能く御記の文面に現はれたるが、此は新學説輸入の際に免れ難き所なるを、花園上皇は能く其の説を咀嚼して、儒佛混淆を不可とすると共に、大體に於ては謂なきに非ずと爲して、疑殆の念を挿みたまはざりしこと、明眼卓識、恐感に堪へず、後醍醐帝が文弊を救はんとして始めて宋學を講じ、花園上皇が陰ながら賛成の意を表せられしは、實に宋學傳來史上に特筆大書すべき所の者なり、

後醍醐帝は已に宋學を以て禁裏風なる一派を立てたまひしが、帝の目的は固り宋學に因て大義を講明し、朝臣の氣節を激勵して、以て政道の中興を謀らんとするに在りしならん、蓋し程朱の學説は此の目的に相應せる者なり、而して朱子は南宋偏安の世に生れ、一日も興復を忘れず、其史論往々爲にする所ありて而して

王室式微
南宋偏安

發難諸功
臣と宋學

無禮講

支那進講
と大日本
史

太平記の
小説的記
事

發する者あり、後醍醐の朝、武門陪臣の窘迫する所と爲りて、王室式微、虚器を擁せらるは、亦之と相似たり、心ある廷臣が宋學に因て感興激厲する所の者甚だ大なりしを疑はず、帝の謀臣なる源親房、日野資朝、日野俊基の如き、蒸々として個中より出でしも亦宜ならずや、花園院御記に、近日の風體、理學を以て先と爲し、禮義に拘らざるの間、頗る隱士放逸の風ありと云へる者は、所謂無禮講なるべし、帝は人心收攬に急なりしより、後には廷臣のみならず、將士をも無禮講中に召されしと見ゆ、大日本史文學傳に、帝竊に北條氏を滅さんことを謀る、權中納言資朝其の事を賛成し、無禮講を設けて將士の心を結び、人の怪む所と爲らんことを恐れて、陽に玄惠を延きて書を講せしむとあり、陽の字は表面を飾ることにて、眞意は講書に非ざるを言ふもの、此は其の實を誤れるに似たり、大日本史の根據は太平記なるが、太平記には、人の無禮講を咎めんこともやあらんとて、事を文談に寄せん爲に、玄惠をして昌黎文集を講せしめられけるが、昌黎潮州に謫せらるゝ詩を講ずるに至りて、不吉なりとて談義を止めたるよし記せり、此は作者が後日の俊基東下り資朝遠流等を昌黎の選謫に比して、附會せし小説的記事のみ、以て史證と爲す

に足らず、讀者は無禮講が君臣和合の爲に禮節を略せしに始まり、玄惠をして四書を講せしめられたるは、帝の深意に出づるを知らざる可からず。

建武中興
は宋學の
功

北條貞時は兩統交立の期を十年に限れり、帝は恢復に急ならざるを得ず、而して大謀は受禪即位後六年なる正中元年に發覺せり、發難の謀主にして道學の大意を得たりし日野資朝は佐渡に流され、俊基は鎌倉に送られ、帝は誓書を賜ひて大事忽ち去りしも、元弘の亂を経て、遂に大業を建武に中興するを得たりしは、宋學研究に因て感興激發せし忠義の氣の磅礴せる結果に非ざるか、建武中興の業をして確立せしめ、大學寮に勅して別に新註の明經博士を置き、以て四書を施行せしめ、漢唐註疏と並び行はれしめたらんには、學問の一變、人文の進歩、果して如何なりけん、帝の塔婆佛經造寫願文に、詩書禮樂の紹隆、宸衷無貳、名法刑賞之遵行、國典未嚴とあり、中興の禮樂未だ紹隆に遑あらずして、而して大業忽ち敗れしは、誠に刑賞の嚴ならざるに因れり、是れ講學の功未だ至らざりしが爲に非ずや、予れ帝業の爲に惜み、又學問の爲に惜まざるを得ず、然れども道義の學を以て、浮華の弊を救ひ、氣節を激厲して、以て前代の衰を振ひ、倫常を扶樹し、名教を維持して、以

て後世をして範を取る所あらしむ、帝の賜も亦大ならずや。

三、玄惠法印と源親房

玄惠略傳

後醍醐の經筵の講師たりし玄惠は、林春齋の一人一首に、儒家にして而して台宗に歸し、而して後に還俗すと云ひ、大日本史は太平記尺素往來に據りて、其の世系を詳にせず、北小路に居て、獨清軒と號し、又健叟と號し、粗書史に涉り、又詞藻ありと記せり、花園院御記には僧都と云ひ、圓太曆尺素往來には法印と云ひ、後三年軍記には樞大僧都とあり、何れにしても天台宗の僧なりしと傳へたるが、常に司馬光の資治通鑑を讀みて程朱の説を尊信せしこと、尺素往來に徴すべく、花園院御記にも、禁裏の風が宋朝の義なるを明記し、且行親大學頭紀朝臣等が佛に涉れるを非難したまひしも、玄惠に至りては誠に達道かと稱賛ありしに觀れば、玄惠の説は頗る醇にして、講義に長せしとも知らる、然れば大日本史に、後醍醐帝召侍讀、先是經筵專用漢唐注疏、至是玄惠始唱程朱之說と云ふ者は、赫々たる事實なり、但玄惠は何人に従つて宋學を受け、ん未だ其由來を究むる者あらざるは千古の

程朱學の
偏見

京學の保
障

詩人玉屑
の和點

玄惠と建
武式目

憾事なり、佛家人名辭書は、虎關を以て玄惠の俗弟と爲すも根據確ならずして師承詳ならざるは、日本朱子學派の哲學も之を言へり、後醍醐の庶子にして虎關の弟子なる龍泉令淬の松雲集在五山文學第一輯に、貽獨醒老書あり、獨醒は即ち獨清と同じく、玄惠の別號なるが書中に伏念叟爲京學之保障、而士大夫之有文者、莫不從而受教也云々と見ゆ、以て玄惠が京師の學問界に於ける勢力を察すべし、京學の字、既に南北朝の時に見ゆ、玄惠は實に京學の祖にして、惺窩は其の後裔なり、五山版を朝鮮にて翻刻したりけんと思ゆる詩人玉屑に、茲書一部批點而讀畢、胸臆之決錯謬多焉、後學之君子、望正之耳、正中改元鹿月下澗、洗心子玄惠誌の跋文あり、由は右文故事録に見えたり、倭板書籍考には、玄惠は世に云北島の獨清軒玄惠なり、玄惠に儒名あれども實は佛者なり、倭點に誤多しと云へり、跋文の二三十字を見るも、東鑑流の文體にして、五山の漢文に若かざるや遠し、其の詩は、康永二年の五十四番詩歌合に在り、蓋し詩文よりも講釋上手也、又法律典故に通せしを以て、後尊氏直義兄弟に信任せられしが、尊氏を諫めて延曆寺廢止の議を罷め、權臣を憚らずして、蟄居せし直義を訪ひ、太平記の記事公平ならざるを駁し、又は建武

開齋の玄
惠論の參
禪

玄惠と大
徳寺

儒禪衝突

式目の議に與りし等の事蹟は、大日本史に見えたり、山崎闇齋は玄惠が程朱の正説たるを知りて、佛に免る能はざりしを詆れり、此は、神道家の潔癖に似たりといへども、亦誠に一理あり、高僧傳に、玄惠は元亨宮論の後、妙超に歸禪し、屢紫野を訪ふて參禪し、粗造詣あり、因て私宅を捨て、方丈を建てつ、又富家翁に宗印といふ者あり、自ら化主と爲りて諸堂宇を營みしより、鬱として巨刹と爲りし者、即ち是れ龍寶山大徳寺なりと云へり、大燈國師行狀に據れば、玄惠法師、儒者九人と偕に、朝に奏して禪宗を破せんと欲し、徵詰するに意に當る者なし、諸儒妙超の名を聞きて、特に來りて禪宗の手段如何を問ひしより、妙超は孟子の象が舜を殺さんとし、事を擧げて問答し、激揚鏗鏘たりければ、諸儒皆稽顙して弟子の禮を執り、中にも玄惠は入室參禪して、造詣淺からず、崇信に勝へずして第宅を施し、以て大徳方丈を作れり、今の雲門菴是なりと云へり、儒を抑へて釋を揚げんとするは佛氏の慣手なり、且つ當時顯密より禪に歸せし者多く、儒者も半儒半禪にして、儒禪衝突の事あるべき時代ならねば、事頗る疑ふ可きに似たれども、或は程朱の新説を誇れる諸儒、時を得て勢に乗じ、以て禪宗を破せんと

宗峰妙超

企てつるにや、而して脆くも大敗を招きしを事實とすれば、妙超の學力ありしを知る可し、宗峰妙超は紀氏、播州掛西郡の人、高峰顯日及び南浦紹明に學び、南浦化後、洛東雲居寺に居ること二十餘年に及び、嘉曆中紫野に小院を構へて之に住せり、玄惠等諸儒の妙超を叩きしは此の時なり、妙超は後醍醐帝の歸依僧にして、元弘三年に本朝無双禪苑の震翰を大徳寺に賜ひ、尋きて五山の一に列せられつ、超は建武四年十二月二十二日を以て寂せり、然れば諸儒の問難は正中比の事にもや、玄惠儒家に出で、台僧と爲り、二人一首の説其の據を知らず、僧より儒に歸し、儒より禪に參す、固より之を待つに儒者の作法を以す可らず、還俗の説あれども、此も亦蓋し山崎闇齋の佛を出で、儒に入りしと同じからず、唯寺に居らずして俗間に在りしに過ぎざらんか、時代思想を以て之を論すれば、深く咎むるに足らず。

洞院公賢の痛憤

玄惠は北朝の觀應元年三月二日を以て逝けり、洞院公賢は其の死を聞きて、圓太曆に「文道の衰微か、天下頗る文に向はず、文王已に没するか、不便不便と記せり、公賢の博覽宏識を以てして此の言あり、以て玄惠が當代の師表と仰がれしを知る

玄惠舊居の詩

べく、南朝の忠臣源親房も亦其の門に出でしを觀れば、玄惠の人物亦凡ならざりけん、天龍南禪等に歷住して、永享元年に八十一にて化せし、惟忠通恕が雲壑猿吟の中に、春日過健叟舊居の詩あり、曰く、

健叟幽廬萬竹青、春陰寂々鎖林扃、日斜野鳥啼還歇、泥濕簷花落更馨、盡謂地中埋玉樹、那知天上有文星、淒涼三十餘年後、楚些臨風吊獨醒。

是れ玄惠死後三十餘年の至徳前後に作りし者なるべし、通恕は無涯仁浩の嗣法弟子にして、學内外に通せし僧なり。

親房は三房の一

源親房は定房宜房と共に三房と稱せられし人にして、才は文武を兼ね、學は和漢に通じ、特に南朝の忠臣にして、赫々たる大節載せて國史に在り、而して其の學玄惠に出で、蘊奥を極めしは、一條禪閑之を言へり、元々集は、天地開闢を論じて、大學の綱領條目及び太極圖説の語あれど、其書或は親房の作に非ずとの説あり、其の宋學に關する所説を知るべき者なきも、神皇正統記に専ら南北の正閏を論せしは、朱子の通鑑綱目が魏を斥けて蜀を尊びし意なるべし、其の學説は神儒佛を混じ、且陰陽五行に及びて、緘緯の學を雜え、純乎として醇ならずと雖も、其の國體

親房の學

尊内卑外主義の祖

を明かにし、國民道德を論じ三種の神器に正直智恵心性を説き、異國が我を東夷とすれば我は彼の國を西蕃とも云ふべしと爲して名義を正したるは、後世國學者の尊内卑外主義を激興し、水戸の大日本史の如き、本居宣長の鉗狂人馭戎慨言の如き、亦此の説を祖述するに非ざる莫し、而して義朝の不孝を指斥しては、彝倫を明にして名教を講じ、元弘の亂に人臣の道を論じたる、詞嚴に義正しく、一に至誠に發せり、誠に一代の大儒と謂ふ可し、其餘資朝俊基等の大節に至りては亦宋學中の人たるに恥ぢず。

度會成行

當時伊勢に度會成行といふものありて、其が元應二年に著し、神祇類聚本源の中に、周濂溪の通書の語を引けりと漢學紀源に見ゆれど、予未だ其の事蹟を詳にせず、垂水廣信といふもの、程朱を篤信して藤原藤房に勸めしこと、濟々草に出づとの説を信する者あるも、藤井瀨齋跡部光海等、此は替者佐々木玄信が妄説なりと、先賢已に駁撃して遺す無し、而して當時猶儒佛二教に涉れる禪林の一豪傑あり。

垂水廣信は妄説

附 録

康永二年北朝内裏五十四番詩歌合 (大日本史料)

山家春興

四 番

左 勝

法師 玄惠

路接桃源傍水濱、烟霞鏤處絕無隣、惜哉九陌紅塵客、不見山中一段花。

右

坊 門

山たかみ我いほりにて見渡せは麓をめぐる花の白雲

十一 番

左 持

法印 玄惠

游人結隊爲花來、猶掩柴扉晝不開、更想陽春三二月、移居別處白雲堆。

右

永福門院右衛門督

まつとなき人目もはるはみやまへや花鶯の宿の情に

幽思不窮

十九番

左勝

立 惠

深殿無人簾影斜。等閑把撥弄琵琶。不堪半夜朦朧月。亦是空庭寂寞花。

右

坊 門

あはれ身をいかなる谷にしつめても深き思の底はみえしな

二十三番

左勝

立 惠

潛襲仙衣不。曾薰朝々只禮玉晨君。紗窓獨坐天將暮。忍出瑤階看碧雲。

右

右衛門督

しつむとも君をみるめの浦ならば千尋の底もたつねさらめや

海邊眺望

四十一番

左勝

立 惠

碧波心上白鷗前。推出漁家一釣船。萬里逢瀛休遠覓。風塵絕處是神仙。

右

右衛門督

村千鳥飛かふ沖の末の松風しつかなる浪の遠かた

五十四番

左勝

立 惠

沙嶼松低潮滿處。海門山近月昇時。幽人相對更愁絕。難寫畫圖難入詩。

右

坊 門

なかむれはゆきかふ船もかすかなり浪こす末の松のたえまを

(六) 禪林の宋學者

上、虎關の御侮 附道隱と正澄

虎關略傳

禪林の一豪傑とは誰ぞ、虎關和尚名は師鍊其の人なり、姓は藤原、弘安元年を以て京師に生る、幼より讀書を好み、文殊童子と目せられしが、性多病なりしより、書卷を奪ふて之を匿すも、搜索して之を讀みけり、八歳にして寶覺和尚に千里の駒と云はれ、十歳祝髮、十四に問答人を驚かし、頓て四方に遊びて、南禪の規菴祖圓、圓覺の桃溪德悟に參せり、規菴は祖元の弟子にして、桃溪は道隆の門下なり、又寧一山に參して、儒釋の書を問ひしが、其の學力の長進は此の時に在りけん、年二十餘に至りては、三藏の聖教、諸家の語録、九流百家、本朝の神書に至るまで、涉獵せざる莫し、本邦禪僧の入元は此比より流行して、中には庸流を混せしより、虎關は國恥なりと爲し、我れ南游して國に人あるを知らしめんとて、正安元年には入元を企てしも、母に留められて止み、此より東西を徧歴する者二十餘年、遂に濟北菴を京の白河に創して之に居り、専ら著述を事とし、尋ぎて三聖東福南禪に歷住し、東福

廣流の入元は國恥

虎關の著

の海藏院に居り、六十九歳の貞和二年に化せり、其著述は元亨釋書三十卷、濟北集二十卷、聚分韻略五卷、及び佛心語論、十禪支錄、禪餘或問、禪儀外文、正修論、禪戒規等あり、元亨釋書は我邦僧史の始なるが、此は虎關が一山に漢土の事ども問ひし時、一山又本邦の事を反問し、虎關返答に窮しければ、一山其の外に馳せて内に疎なるを諷しけるより、發奮して編著せし者なり、書成りて朝に上りしは、年四十五の元亨二年なりしより斯くは名けらる、其の榮西傳の贊に、仲尼没而千有餘載、繼接之者幾許乎、只周濂溪獨擅興繼之美矣とあり、濟北集にも儒學に論じ及びし處多く、儒釋兼通の人と知られしのみならず、中巖圓月は其の伊洛の學に精しきを稱せり、誠に然り、彼は程子の書をも讀み、朱子語類をも讀みて、性理の説にも通じたりしが如し、然れども虎關の宋學觀は、周濂溪一人に推服せるも、程朱に慊焉たり、其は程朱が佛氏を詆排したればなり、濟北集中の通衡を讀むに、圭堂の大明錄に程明道の語を引けるを駁し、儒教のみが人道の宗主に非ずして、佛老も亦宗主たりし時代あるを辯じ、輔教編を引きて五常五戒の同じきを説き、遂に儒釋の同異を説くは、六識の邊際にして、七八識に非ずと云ひ、司馬溫公が佛書を讀ますして、

虎關と宋

濂溪に服して程子に慊焉たり

我邦の明教の宋學研究の大立者

靈山道隱

凡心を以て聖境を議するを笑ひ、晦菴語錄に百家を品藻して理に乖く者多きは笑ふ可しと爲し、朱氏佛教に委しからずして妄に誣毀を加ふるは一笑に充らず、我れは朱氏の儒名を賣りて吾を議するを責むと云ひ、遂に大惠語錄を讀みて其の機勢を剽みながら傳燈を毀れる朱氏は醉儒に非ずと誹れり、蓋し虎關の宋學研究は、尊信に出でずして佛法擁護に出でしなり、其は仔細ある事にて、虎關の少時、宋の明教大師が參禪超悟の外に輔教編を作りて儒林の侮を禦ぎし事を聞き、心に深く之を慕ひしと云ふ、然れば彼れが程朱攻撃の本意は禦侮に在りて、其の辯説に巧なる、我邦の明教とも謂ひつべし、但虎關は程朱の排佛を攻撃せしのみ、程朱の學説を攻撃せしにあらす、既に性理にも通せり、當時の宋學研究に資せしこと多かりけん、虎關は實に宋學研究の初期に於ける大立者なり。

元僧の來朝は、後醍醐の朝を尤多しと爲す、最初の歸化は、元應の初年に本邦の風を聞きて東渡せる靈山道隱(杭州人)にして、北條高時迎へて建長に住せしめ、夢窓疎石之と唱酬せり、歸化五六年にして、正中二年には年七十一にて化しき、著述は業識圖と云へる偈頌一冊あり、次に來りしは高時の聘に應じたりし清拙正澄福

清拙の僧
僧謙

清拙の土
岐頼直

州連江劉氏にして嘉曆元年博多に着き、明年鎌倉に入て建長に住し、後ち建仁南禪等に遷り、年六十六の曆應二年に寂せり、遺著に清拙和尚語録十冊(寫本)ありて、内二冊は日本録なり、外集には禪居集あり、本色の禪僧なりけんと覺しく、近時一等の俗儒僧と爲りて、宗眼なく、衲僧の氣息なく、本色の提綱なく、却て叙謝の文章を製作して、其の短を遮れり、など罵倒せり、此は蓋し時風を慨しての激語ならん、彼の故家なる劉氏は儒を世にし、年十五迄は郷庠に在りし人なり、當時清拙を尊信せる濃州の土岐頼直の如き、世儒釋を崇び、子孫を戒めて學を勸めしが如き、清拙の教化なる莫らんか、其の次に來りし明極竺仙の二僧に至りては、宋學と大關係あり。

附 載

濟北集通衡

虎 關 師 鍊

程子攻撃

又程明道語佛氏之教、滯固者入於枯槁、疏通者歸於恣肆、曰此大賢之語也、夫程氏主道學、排吾教、其言不足攻矣、堂已歸我、當辨是等之虛誣、還稱是何哉、吾徒

多焉、枯槁恣肆者、寔不少矣、然評其道者、割索其徒之不善者、託言焉、寧爲公議乎、孔子垂名教也、王莽學之、篡漢祚、苟卿弘大論也、李斯承之、焚秦書、世只罪莽斯、未聞歸咎於孔荀矣、彼程氏何爲者乎、出言之不經也、痛哉、堂之拙於取舍焉、三家章曰、厥初人道之始生、而儒教已爲之主、既而兩教乃入、特爲之伴焉、非主也、又曰、儒教本爲人道之宗主、此等之言、其失不寡矣、夫儒者支那一域之化也、豈閭浮之通典乎哉、支那亦非閭浮之本邦、堂言人道之始、儒教爲主者、是偏狹之言也、又儒爲主、兩家爲伴者、歷代天子多順奉禮樂文物、四海則之之謂乎、以天子順奉言之、亦有不然時、秦燒儒書、此時不可爲主矣、漢文景貴黃老、此時豈爲主乎、魏晉之代、尊虛玄、亦不得主、因此而言、時勢也、非定主也、堂何定主伴耶、夫道者以理爲主、不以迹爲主、以佛教見、儒道者、人天乘耳、猶不與二乘競、況佛乘哉、堂之論、不學之過也、堂又引伊川語、合之曰、眞具正眼者、終不妄摘、其一二句之相似者、強合附會、以素儒宗立天地正人心之大統、所謂不同之同、此言又疎闊之甚矣也、夫儒之五常、與我教之五戒、名異而義齊、不得不合、雖附會、何素儒哉、其餘合句、先輩之書多矣、請先取嵩公輔教編見一遍、雖然、儒釋同異、只是六識之邊際也、至七八識、儒

朱子攻擊

釋無分焉。何合會之有。故曰。儒釋之同異者。六識過際也。非七八識矣。

晦菴語錄云。釋氏只四十二章經。是他古書。其餘皆中國文士潤色成之。維摩經亦南北朝時作。朱氏嘗晚宋稱巨儒。故語錄中。品藻百家。乖理者多矣。釋門尤甚。諸經文士潤色者。事是而理非也。蓋朱氏不學佛之過也。夫譯經者。十師成之。十師之中。潤文者時之名儒。奉詔加焉者多有之矣。朱之謝靈運。唐之孟簡等也。文士潤色實爾。然漢文也。非竺理矣。朱氏譏我而不知譯事也。又維摩經南北時作者。不學之過也。蓋佛經西來。皆先上奏。然奉敕譯之。豈因窓隱几。僞述之謂乎。況具葉梵字。不類漢書。故十師中有譯語。有度語。漢人之謬妄。不可納矣。是朱子不委佛教。妄加誣毀。不充一笑。又云。傳燈錄極陋。蓋朱子之極陋者。文詞耳。其理者。非朱氏之可下喙處。凡書者。其文雖陋。其理自見。朱氏只見文字。不通義理。而言佛祖妙旨。爲極陋者。實可憐愍。夫傳燈之中。文詞之卑冗也。年代之錯違者。吾皆不取。然佛祖奧旨。禪家要妙。拾傳燈猶何言乎。朱氏不辨。漫加品藻。百世之笑端乎。我尤責朱氏之賣儒名而譏吾焉。大惠年譜序云。朱氏赴舉入京。篋中只有大惠語錄一部。又無他書。故知朱氏剽大惠機辨。而助儒之昧勢耳。不然百家中。獨特妙喜語邪。明是王朗得論衡。



22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

之謂也。朱氏已宗妙喜，却毀傳燈，何哉？因此而言，朱氏非醇儒矣。又云：東都事略陳無已黃魯直傳，他好處都不載，謂不見章子厚不著趙挺之襖等，此論爲未盡耳。夫選述之法，有尋得其人全事或半事，或隻事，隨得綴傳者，史人之常也。王偁先也，朱燕後也。黃陳事跡隱于先顯，後者可知矣。朱氏何偏貴之乎？予撰釋書，始不載傳之事，後多得焉，雖欲添入，然進奏之書，不容易改移。後世有朱氏之偏見者，我釋書恐遭此議。

清拙日本錄二則

示訥侍者法語云：吾觀此方學者，不得其正者，以其局於門派，爲學之士，唯守其家傳之業，不能廣入作家爐鞴，其所守專，而其所學則孤陋寡聞矣。日本衲子不參禪，但多記末末尊宿語錄，駸々雜々，填在胸中，準備說禪，依頌等用，既無正見，又多臆說，密傳私受，以爲正宗。訥侍者不信吾言，他時亦在此數。彥曰：清拙罵得痛快，不獨佛徒爲然，其餘學者，今古同病，而仁齋徂徠卓然爲一家，先賢比之周程，亦宜矣。示亨首座法語云：衲子在叢林，十經五論，自在教家傳持，九經十七史，古今興亡治

亂自有儒家講解。祿位權勢自有寵榮顯達之士趨之。我輩沙門釋子。灰心泯志。直造佛祖闡域。真達不疑之地。不愧平生尤可。

下、明極と梵仙 楠正成の學

明極略傳

元僧楚俊字は明極。明州慶元府の黃氏が本邦の聘に應じて、梵仙竺仙(明州象山縣の徐氏)と共に歸化せしは、後醍醐帝の元徳元年にして、時に年六十九の老境なりき。其博多に至るや、太宰府の大友貞宗直菴居士先づ訪問ありければ、萬里凌波到岸時。民音國語未諳知。但聞口裏吧吧說。不解言中歷々辭。大怖忽臨孤客舍。卑情方識異邦儀。通人為報吾儂道。此是朝官一白眉の詩あり、其の坐禮を見ては、展席尙存唐宴禮。對賓猶習淡冠儀の句あり、羈情客況、眼前に現れたり、是より先き歸朝して博多に在りし天岸惠廣は、二僧を伴ひて上洛せしに、帝は異邦の名徳なりと聞召されて、直に宮中に召見あり、禪要を問ひて旨に稱ひ、翌日御使を下されて、佛日燄慧禪師の號を賜ひ、攝津に廣嚴寺を創して開山と爲したまへり、蓋し殊寵なり、尋ぎて建長に住し、建武中興には天下一統の賀表を上り、詔を奉じて洛の南禪建仁に

後醍醐の殊寵

道隆以後の儒僧

三教圖贊

遷り、延元元年九月二十七日を以て、建仁の方丈に寂せり、時に年七十五なり、支那日本九會録ありて世に行はる、明極は蓋し道隆以後の儒僧なり、其の語録も儒教に涉る者多し、三教圖贊に云く、

三教聖人各立本法。儒教大雅之法。其行端確無邪。釋教大覺之法。其性圓融無碍。道教大觀之法。其智廓達無滯。如鼎立足。缺一不可。雖然且三聖人中。那一個合受人天供養。衆眼難瞞。

儒僧の本
色
乾峰十益
の鼎足記

其の重を釋に歸するは、佛徒の常のみ、但三教を論じて要を得ること如此きは、學に深からざれば能はず、其の弟子に乾峰士曇博多人あり、明極一見して瑞物と爲し、提撕倦まず、遂に一世の名僧と爲りて、廣智國師の號を賜へり、其の語録にも鼎足記一篇あり、三教の鼎立を論じて、揚佛抑儒に偏すれども、其治心治身治國を説くは師受に出で、其餘の法語にも周易書經を引く者多し、亦皆明極に受け來る者なり、而して明極が示敬堂簡禪人法語に、論語の居敬行簡の義を演べたるが如き、與博多土都小學士詩に行已莫離忠與信、立身宜謹禮和規と云へるが如き、全然儒僧の本色なり。

梵仙略傳

梵仙は來々禪子、又は無思歸叟と號し、韻書切韻の法に精しかりしが、後ち建長南禪等に住し、年五十七の貞和四年に化しき、語録の外に東度集、天柱集等あり、竺仙梵禪師語録、元祿活版七冊の示蘊規居士法語には、若し夫れ性命の説は、中庸大學の書之を具せり、唯是れ無聲無臭、一言に盡す可き也と云へる、正しく宋儒性命の説を述べし者なり、隨來せる竺仙已に然り、明極も亦程朱に通じたるを疑はず、而して寵を天子に得、信を世人に取る、後醍醐朝に於ける宋學研究に關して、明極も亦與りて力ありけん、或は云く、元弘の亂に、明極後醍醐を相して復讐を豫言しければ、祝髮の沙汰なかりしが、果して建武に驗ありきと、彼が建武中興に關係あるは、豈管に相術のみならんや。

梵仙の性命説

明極と建武中興

楠正成と明極

明極の嗣法弟子なる鐵堂楚心が作りし明極和尚行狀に據れば、四條隆資、萬里小路藤房、防門清忠の諸卿、並に禪要を明極に問ひ、又建武三年五月、即ち延元元年、楠正成湊河に陣せし時、明極を攝州兵庫の廣嚴寺に訪ふて、生死交謝の時如何と問ひ、明極は兩頭俱截斷、一劍倚天寒と曰ひ、正成落處作麼生と問へば、明極震威一喝し、正成通身汗流れて向上の關板を超脱せしが、明日無爲菴に入て自殺するや、明

極衆を率ゐて菴に入り、遺骸を收葬しきと云へり、明極の建仁方丈に寂せしは、是歲九月にして、此の行狀は同年仲冬二十七日に成りし者、正成の死と相去ること半歳に過ぎざれば、史料として信を置くに足らん、又或は傳ふ、明極遺稿の古意二首、

天若無霜雪、青松不如草、地若無山川、何人重平原、願天霜雪多、願地山川竒、善哉君子人、萬世國之寶、

莫入荆棘場、容惡不容善、莫居豪華地、容利不容義、荆棘不可入、豪華不可居、何當展六關、高舉翔天隄、

の詩は正成の爲に作れる者なりと、此は附會の嫌なきに非ず、在元中の作ならんも知れざればなり、而して伊地知潛隱が正成の遺誠を論じて宋學に出づと云へるも亦架空に非ざるか、正成が生平儒學を尊びしは、近藤正齋が右文故事に、楠河州の手録本論語尾州に在りと云へるにも徴すべく、必ずしも臆測附會して、宋學の徒と爲すを用ひざるも、其の名教中の人たるは明なり、宜なる哉、其の仁を成し義を取りて、古の聖賢に愧ぢざるや、聞く正成嘗て寄手塚味方塚を金剛山に築き

正成手寫の論語

正成正行
と赤十字

て彼我の戦死者を吊へりと、其の正行が遺訓を奉じて忠節を盡せるは、未だ其の續む所何の書なるを知らざるも、亦之を學びたりと曰はずして何とか謂はん、渡邊川の戦に、敵の溺死を救へるも、亦楠氏の家法なり、此等戰場に於ける平等博愛の行爲は、やがて今日の赤十字主義にして、我は之を十四世紀の古に實行せり、是も亦儒釋二教の明效に非ずや。

因に記す梵仙語録に、昔保寧に在りて侍者たりし時、日本僧二十二人ありと見えたり、友山士徳の入元せし時(嘉暦三年)は、石室、無夢、此山、無涯、一峰、古鏡、古源等を初め、在元留學僧十數人ありけり、入元僧にして支那の大刹に住持せし者は、雪村友梅、龍山徳見、無我省吾、約菴徳久の四人にして、無我約菴の二僧は彼處に死せり、入元の僧、未だ必ずしも盡く名納ならずして、庸僧凡骨の名も傳らぬが多かるべけれど、歸朝して名刹に據りしは、概皆人傑にして、禪文學及び學藝美術を分布し、以て足利時代の文化の基を開發しき。

入元僧と
學藝美術

附 載

赤十字と武士道

明治三十五年十月二十二日
大阪朝日新聞論文

日本赤十字社は、昨日東京に於て第十一回總會を開き、二十五年祝典を擧げたり、今年は郵便と云ひ、赤十字社と云ひ、文明事業の我邦に行はるゝ者、並に二十五年の祝典を擧ぐ、誠に慶す可きの至なり、然れども赤十字社の精神の如きは、決して西洋の癩興に非ずして、我邦は古より之を實行し來り、維新後彼の長を採るに及びて、更に其の機關の整備を致せし者なるを忘る可らず、何を以て之を言ふ、武士道の神髓是なり。

我邦の古文明は、儒教と佛教とに鑄鑄されたり、故に武士道の如きも、亦儒教より智仁勇の三徳を受け、佛教より降魔の利劍と救世の慈航との調和を受けて、而して情を知るは、武士とも云ひ、武士は物の哀れを知るとも云ひ、威ありて猛からず剛にして情を知るを、武將武人の鑑と爲したりき、去れば武人の戰場に臨むや、敵と爲り味方と爲るも、前世の因縁にして怨あるに非ずと觀

赤十字の
精神は武
士道に在
れる説

じ武士は相身互に云ひて、交戦接刃の間にも、禮を重んじ義を守りて、慘忍の所爲あらず、是れ歴代の史乘に赫々たる光彩にして、南北朝の際に至り、殊に戰場に於ける敵味方の仁慈と云ふ精神發達したりき、今其の證を示さんに、金剛山に寄手塚身方塚あり、是れ日本武士の龜鑑たる楠正成の建つる所に於て、戦死者に對する博愛慈仁の涙は敵味方の區別なく、其死骸を葬りて追福を營みし者なり、獨り死者に對して然りしのみならず、其子正行が渡邊川の戦に於ける博愛の所行は、赤十字社事業の首唱者たるデュナンの論せし所を行ひ、ナイチンゲール女の爲せし所を爲せし者なり、太平記に曰く、

安倍野の合戦は霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋よりせき落されて、流るゝ兵五百餘人、無甲斐命を楠に被助て、河より被引上たれども、秋霜肉を破り、曉の冰膚に結びて、可生とも不見けるを、楠情ある者なりければ、小袖を脱替へさせて身を暖め、藥を與へて疵を令瘵、如此四五日、皆勞はりて馬に乗る者には馬を引き、物具失へる人には物具をきせて、色代して送りけり、されば敵ながら其情を感ずる人は、今日より後心を通せんことを思ひ、

其恩を報せんとする人は、應て彼の手に屬して、後四條繩手の合戦に討死をぞしける。

是れ我邦赤十字事業の祖に非ずして何ぞや、其後島津惟新入道父子が朝鮮陣より歸朝し、敵味方打死の軍兵皆佛道に入らしめんが爲に、一大碑石を高野山に立てしが如き、亦楠公父子の風を繼ぐ者と爲す、其餘此の類猶多からん

博愛の政は、堯舜猶之を病めりと雖も、我邦に在りては古來戦時に於て猶且つ實行されしこと如此し、西洋諸國の基督教は、夙に博愛を標榜すと雖も、實際間の實行は、平時猶覺束なきことあり、況んや戦時をや、其の野蠻にして殘忍なりしは、デュナンの絶叫ナイチンゲールの奮起を餘儀なくせしにも想見すべし、蓋し仁人慈女の絶叫奮起なくんば、外面文明と稱するも、戦時の行爲は今猶野蠻を脱する能はざりしやも知る可らず、而して我邦文明は赤十字事業を待ずして、古來其の精神の實行され居たりしこと如此きは、尙ばざる可けんや、然れども之に關する法規整頓して機關完備せるは、實に西洋文

明の賜と謂はざる可らず、予輩は宜しく予輩の祖先より遺傳せる武士道を繼承し發揮し、彼の機關を取りて我の精神を行ふことを努むべきなり。(彦)

新作薩摩
聖歌 武士道

天 四 作

武士道の歌

我が日の本は昔より、武を以て國を建て、智仁勇の三徳を兼備したるを武士道とも、日本魂とも申すぞかし、天つ日嗣の御寶に、三種の神器おはします、鏡は智なり、劔は勇、玉は仁の徳にして、教は此に根ざせりと、親房卿も説かれたり、武人の習智略に富み、勇は萬夫にすぐれたる、其人なきにあらねども、仁なき時は小智にて、匹夫の勇に異ならず、されば百行萬事の本、唯是れ仁の徳に在り、軍も民を救ふ爲め、智勇も仁より出るなり、武夫は、物のあはれを知ると云ひ、情知らぬは武士ならずと語り傳へし諺も、此の國體によるとかや、此に我が邦武士道の、鑑と仰がれたまへるは、楠正成朝臣にて、智仁勇を兼備へ、敵兵にまで情あり、金剛山の寄手塚、敵の菩提を吊らはる、其子正行朝臣、庭の訓を受け繼ぎて、南朝二代の忠臣なり、比は正平二年霜月末の事かとよ、敵の大

將山名伊豆守時氏、細川陸奥守顯氏、數千騎の大軍にて、クッ、河内の國へ發向す、正行斯くと聞きて猶豫せず、二千餘騎を引率して、瓜生野に打ちて出づ、兩軍鬪をどつとあげ、一度に颯とかけ合せ、追いつ追はれつ攻戦ふ、味方の若武者和田新發意源秀、小歌うたひて進み入り、身の丈七尺有餘の法師武者阿間了願も、一丈ばかりの大槍を、馬の平首に引添へ、前後左右を突いて廻れば、矢庭に三十六騎打取りつ、太刀の鏝音天に響き、汗馬の足音地を動かす、大手の大將伊豆守、矢疵太刀疵七所負ひ、敵にうしろを見せければ、一騎も更に返し得ず、馬は弱はりぬ、敵は追ふ、渡邊川にせき驚され、流るゝ兵、五百餘人、霜月末の事なれば、秋の霜は肉を破り、曉の冰膚に結び、所詮生くべきやうもなく、憐と云ふも思なり、吟カハリ、情を知れる正行は、溺るゝ敵を救ひあげ、小袖かへさせ身をぬくめ、藥を與えて疵を療し、四五日ばかりいたはりて、物の具着せて馬引かせ、式代してぞ送りける、敵も味方も正行が、仁に感せぬ者ぞなき、其後文祿慶長の、朝鮮陣のありし時、島津惟新入道義弘、同じく子息忠恒は、凱旋の後高野に登り、敵味方打死の軍兵、皆佛道に入らしめんと、供養の石碑を立

てたるも、楠公父子をぞ學ばれたる、是れ皆武士の鑑にて、彼の外つ國の赤十字、博愛の道はいそのかみ、ふるき世よりも傳はりて、我が武士道にこもりたる、御國の教ぞ難有き、時は今、武を奮ふべき時なるぞ、智は鏡、勇は劍、仁は玉なる、武士道を、守りて起てよ、諸人よ、御國の光かゝやかせ、御國の譽を揚げよかし。(明治三十七年一月作)

(七) 中巖圓月の尊信

緇衣の需▲中正子十篇

禪子の宋學に於けるや、性の一字、之が楔子と爲るも、固り内主外奴の見あり、之を説くも、亦或は禦侮に出で、或は談資と爲すのみ、虎關の清言に云く、經史は詩文の鹽醬なり、饌餐の鹽醬に傷る者、食ふ可からず、詩文も亦然りと、蓋し彼等は儒を以て禪文學を調和するに過ぎず、其の心頗る程朱を尊信せし者は、中巖圓月に始まり、鎌倉の末より南北朝に涉りて、宋學の種子を播布せり。

圓月字は中巖、號は中正子、土屋氏の一族、元僧一山來朝の翌年なる正安二年を以て鎌倉に生る、十二にして孝經論語を讀み、又算法を習へり、初め顯密を學び、後禪に歸して入元僧約翁に參し、元僧東明を師とし、更に虎關を叩き、後醍醐の正中元年に入元せり、時に年二十五、其元在るや、觀瀾張學士と太極無極の義一貫不二の道を論じ、賀九成薩天錫と唱和し、居ること八九年、元弘二年歸朝して、明極に南禪に依り、尋ぎて上州利根の吉祥寺を創し、建武中興には、賀表と共に原僧原民の

釋林の程朱尊信者

中巖略傳

二籍を上りて諷諫する所あり、後ち洛の萬壽に居り、菴を創して砂喜世界と云ひ、
（後ち建仁に移しき）建仁等持建長を歴董して、江の龍興に住し、天授元年北朝永和
元年入寂、年七十六なり、著述は語錄二冊、東海一漚集三冊（或云有別集十一卷）、中正
子一冊、瓊細集、日本書、文明軒雜談等あり。

中巖の文
の釋服儒心
の人

中巖は三藏の秘詮を收め、五車の肥潤を嗜み、最も文を能くして、力を韓柳に得た
り、故に高僧傳贊は、本朝緇林に文章ありて以還、抗衡する者なく、光前絶後と謂ふ
可しと曰へり、雜談は大學の致知格物を引き、温中説は繫辭の顯仁藏用を引き、道
行説は中庸の費隱を引く等、其の説皆經傳に根柢し、且つ虎關が朱子を稱して朱
氏と曰へるに反し、中巖は尊んで朱文公と稱せり、（文明軒雜談に云く、昌黎五百家
註は煩冗なり、朱文公の考異最も益あり云々）而して中正銘室欲銘二篇の如き、釋
服儒心の人に非ざれば言ふ能はざる者なり。

中正銘並序

中正銘

道之大端有二、曰天曰人。天之道誠也。人之道明也。夫惟誠明之合乎體則中也。正
也。正也者、遵道而不邪、中也者、適道而不偏、適故能通、遵故不失、不失者、微于理而

正也。能通者、精于事而中也。中正者、道之大本也已。予所居皆以中正扁焉。庶幾乎
道也。不可須臾離也。之訓也。且繫以銘銘曰。
執中乎性。以行厥正。惟道之盛。天錫爾慶。遵之以正。恒而毋病。行正乎躬。以執厥中。
惟道之通。天錫爾豐。適之以中。變而無窮。中兮弗過。正兮不願。馴致大和。母以叢脞。
惟道之大。行之毋墮。

室欲銘並序

室欲銘

孟子曰。無羞惡之心。非人也。天下之可羞可惡者。皆由不窒欲也。作室欲銘銘曰。
化母之產。萬彙異質。性變之情。以喪醇實。動物之凡。所欲如一。君子於斯。止不縱恣。
好惡中節。中和莫失。乃能保之。受天陰隲。小人反之。禽獸之匹。爪牙爭利。猛螫娼嫉。
人而非人。可醜可恤。戒哉銘乎。欲也宜窒。

中正子十篇は、其の心血の傾注する所、仁義の道性命死生の理を論じて、儒釋不二
の本傾を發揮せる者なり、叙篇は内釋外儒の宗旨を掲げ、子思の誠明、孟子の仁義、
皆道に醇なりと爲し、荀や醇にして而して小滴、揚雄は殆んど庶きか、其文や緊な
りと論じ、夫子の化、愈遠くして愈大、後生孰れが能く跋でんと贊し、韓愈は果敢、道

中正子十
篇の大意

に小詭なり、文は八代の衰を起す、尙ぶ可し、柳や淵其の文は騷多し、歐陽修は韓を宗とし、軾や轍や文を善くす、莊は清老は靜、莊の文は甚だ奇なるも、教化に於ては不可なりと評したる、妮々として聽く可し、仁義篇は、仁は天生の性、義は人倫の情にして、忠孝は仁義に出づと爲し、仁の弊や威なく、義の弊や慈なしと言ひ、方圓篇は、誠明を推論して、大本達道を講じ、行は方ならざれば誠ならず、言は圓ならざれば明ならずと言ひ、經權篇は、文武王霸を論じて、治國平天下の道を陳じ、革解篇は、易理を説き、治曆篇は、曆數を説く、以上外篇、性情篇は、一書の神髓なり、曰く、中は則靜なり、喜怒哀樂の未發は性の本なり、性や靈明冲虛、故に覺と曰ふ、曰く、靜は性の體なり、常なり、感じ而して動くは用なり、變なり、曰く、喜怒哀樂の發するは情なり、情の發するや、和せざれば節する能はず、曰く、孔子の道、佛と表裏を相爲して、而して性情の論、雙璧を合するが如しと、頻に孟子を難し、韓退之を詆り、佛を引きて孔子子思に合せんと力めたり、死生篇は、出離超脫の説なり、戒定慧篇は、定は靜に證し、戒は禁に齊ひ、慧は明に生ずるを説き、仁義の道は、誠を以て貞と爲す、誠を以せざれば、道行はれず、真如の理は、定を以て正と爲す、定を以せざれば、理明ならず

儒釋雙璧を合する如し

儒六佛四の見

と言ひ、問禪篇は、禪語は、寓言を假りて、不文の徒に解し易らしむる者にして、伊洛の學、張程の徒の或問辯難と異れりと云ひて、眞覺離言の旨を表せり、以上内篇、其餘名言至理、層出疊見して、而して宋儒の説と相似たり、要するに、中巖の學は、易中庸を祖述して、誠明の二字を標榜し、以て儒釋を同化せる、正に是れ半儒半佛に成る者なり、豈緇衣の儒に非ずや、但中巖に病む所の説一あり、羅山文集卷三十六に曰く、

太伯

聞太伯可謂至德、則仲尼之語也、後世執簡者、以本邦爲其苗裔、俗所稱東海姬氏、國之類、何其誕哉、本邦元是靈神之國也、何故妄取彼而爲祖乎、嘗有一沙門、修日本紀、以太伯爲我祖神者、時天子怒其背朝儀、遂火其書、實乎否乎、至若伊勢內宮、揭三讓以爲額、亦是誰所爲歟、

後ち關齋も亦姫氏國辨を作りて、野馬臺の詩を駁せしが、羅山の所謂一沙門は何人ぞ、留守友信の稱呼辨正に曰く、

姓氏尸族第四

◎中巖四月の書信

羅山の駁

姫氏國辨

纂疏曰。晉書傳曰。倭人自謂秦伯之後。然吾國君臣皆爲天神之苗裔。豈秦伯之後哉。此蓋附會而言之矣。嘉謂夫自謂秦伯之後。國史無其徵。則無稽之言。源親房藤兼良識之是也。釋圓月修國史。用秦伯之說。朝議禁止之矣。

中巖の日本書

中巖の自歷譜に。曆應元年辛巳。杜門於藤谷。修日本書と見え。又翌年は康永元年壬午夏。下鎮西。官司文書下。禁乘船。故不得再出。而歸藤谷。過歲とあり。羅山の所謂一沙門の日本紀は。即ち中巖の日本書にして。書中吳の秦伯の事ありしより。朝議を得て公行を禁せられ。其の身も亦藤谷に銅せられたりと見ゆ。是れ日本書の後世に傳はらざる所以なり。秦伯の事は中巖始て之を唱へしにあらずして。早く已に此の妄説ありしを。親房も之を駁正せしが。中巖之を信じて日本書に筆しけんは。其の學識にも不似合なる疵瑕たり。當時滅板の朝命を得て後世に傳はらざるは。中巖の幸なりといへども。其の説猶人間に存して。識者の駁撃する所と爲りしは。中巖の爲に之を惜まざるを得ず。然れども中巖が上建武天子表の如き。漢泰に繼ぐの時を以て當時を論せしは不倫なるも。興王除霸の時。更化革弊の急を論せしは。經世の識あり。煌々たる文章。尊王の誠を見る。固より瑕を以て瑜を掩ふ可らざるなり。

附 載

仁義篇 中正子

中 巖 圓 月

或問仁義。中正子曰。仁義而已矣。曰。母以尙乎。曰。何尙之有。子曰。墨翟之仁。而可尙之。問何尙。曰。義。楊朱之義。而可尙之。問何尙。曰。仁。子曰。嗚々之仁。可謂仁乎。小仁也哉。瑣瑣之義。可謂義乎。小義也哉。聖人之道大也。仁義而已矣。何尙之爲。惟仁義之道大矣哉。子曰。惟天之春秋。猶人之仁義。與。仲明問曰。墨也。春與。楊也。秋與。聖之道也。春而秋與。子曰。白也。可以與語仁義之道矣。或者疑子曰。春而不秋。不可成也。秋而不春。不可生也。或者出問之。仲明曰。何謂。仲明答曰。楊朱以離仁爲義。人而無仁。何以能生。墨翟以離義爲仁。人而無義。何以能成。無仁則非人也。無義則非人也。有仁而生。生而必享。有義而成。成而必貞。譬如天有春夏秋冬而成。非耳。中正子曰。元者生乎仁。故曰善之長也。亨者其禮哉。嘉之會也。利者成乎義。故曰義之和也。貞者其信哉。事之幹也。子曰。春元夏享。秋利冬貞。天之行也。仁以生。禮以明。義以成。信以

誠人之行也。仁也者，天生之性也。親也，孝乎親也。義也者，人倫之情也。宜也，尊也。忠乎君也。忠孝之移，以仁義相推耳。名異而實一也。仁義之離，楊墨之道也。邪之道也。偏之道也。楊也爲我，墨也無親，無親何以爲仁，爲我何以爲義，是故墨之仁非仁也。楊之義非義也。楊墨之道，不能推而移，所以仁義離之者，臣弑君，子殺父，權與乎楊墨。惟聖人者，與能推而移之，是以仁義不離，正之道也。中之道也。子曰：仁義者，天之道，與天之道親，親人之道，尊尊親親之仁，生乎信也。尊尊之義，成乎禮也。天之道雖殊，推而移之一也。一之者可謂知也哉。仲明曰：由冬而春，由夏而秋，天之道也。由信而仁，由禮而義，人之道也。此之謂乎。曰：斯而已矣。仲明曰：誠行仁義，則禮也，信也，孝也，忠也，在其中矣。曰：何惟四者而止，推而行之，萬善之道備矣。仲明曰：子言乎仁義禮信忠孝，明矣，詳矣，而未聞之言乎知。何也。曰：知之，之謂知也。已，仁義之道，推而移之，可謂知之而已矣。或者曰：孟子曰：何必曰利，而子謂元仁亨禮利義貞信，以利爲義，何其與孟子相反之爲。子曰：孟子惡乎惡利。惡夫梁惠王所以爲利之利而已。利者義之和也。宜也，通也。之利，孟子寧舍諸，敢問惠王之利何如。曰：財用功澤之利。孟子不取爾。誠王侯卿大夫士庶人交征利，則國家之危，不待終日，亦何利之有。

孟子不取也宜矣。孟子曰：未有仁而遺其親者也，未有義而後其君者也。義者宜也。天下行宜，不亦利乎。惟利之大，義莫之甚。中正子曰：凡天下之事，靡不有弊。仁之弊也，無威，義之弊也，無慈。無威則教導隱之，無慈則化育夷之。教導之隱，何以治之。化育之夷，何以尼之。教而不治，義不之爲也。化而不尼，仁不之施也。教化之張，仁義之行也。教化之弛，仁義之弊也。或問楊墨而論孰賢。曰：墨子哉。孟堅之書，取之九流，有由矣夫。

性情篇 中正子

中正子居，桑華子侍。中正子曰：桑女知性情之理乎。曰：未。敢問何如。曰：居吾語女。樂肥曰：人生而靜，天之性也。感物而動，情之欲也。中庸曰：天命之謂性，又曰：喜怒哀樂之未發，謂之中。發而皆中節，謂之和。以子言之，所謂中則靜也，喜怒哀樂未發，則性之本也。天命稟之者，性之靜本乎天，也是性也。靈明冲虛，故曰：覺喜怒哀樂之發，則情也。情者，人心之欲也。是情也，蒙鬱開胃，故曰：不覺。人之性情，猶天之四時也乎。桑華子曰：何謂也。曰：四時之行，終而復始，周於冬至。冬至之月，建子。冬者終也。子者始

也是月也。動息地中。商旅不行。後不省方。則天之靜也。然春陽之來。草木之生。亦以天命之性也。既生者。必求長養之道。故夏之草木蒙鬱。開胃者。天之欲也。欲之長。不可涯。故秋殺之氣。擊彼草木之蒙鬱。開胃者。發而中節之義也。然而冬之至也。靜焉而復。復其見天地之心乎。是故曰。人生而靜。天之性也。桑子曰。靜者性之體也。常也。感性情。天之寒煖也。請問性也。靜矣。何緣感物而動。中正子曰。靜者性之體也。常也。感而動。則其用也。變也。耳目之官。引物而內諸心府。於是其性不能不感動也。是以善惡取舍之欲生矣。苦樂逆順之情發矣。惻隱之仁。羞惡之義。則情之善者也。忿讎之暴。騶快之邪。則情之惡者也。煦殺怨懟之音。情之苦也。寬胖綽裕之容。情之樂也。皆無不本於性而發於情。情之發也。不和不能節。是亦天人之道也。以言乎人道。則和則能明。明則能斷。斷則能正。正。貞人道之常也。以言乎天道。則春和夏明。秋斷冬正。正中天道之極也。人守常。則天之極。天之極。靜而已。靜。天之性。寒煖雷雨。天之變也。靜人之性。喜怒哀樂。人之情。情者性之變也。和而節之。則歸性。猶天道之復於冬至也。是故動極則靜。靜故能動。天人性情之道也。孔子曰。利貞者性情。言俾情能復其性。利者秋之斷也。貞者冬之正也。正者極也。中也。靜也而已矣。天之道非真正。則萬

物之動不靖。人之道非真正。則萬行之業不成。故俾情復於性者。靜而已。靜而極中。天地以此富有萬物。人道以此修證萬行。是孔子子思之言乎。性也。不與吾佛之教相際也。如此孟軻氏以降。言性者。差矣。或善焉。或惡焉。或善惡混焉。或上焉。中焉。下焉。而三之。皆以出乎性者言之耳。舍本取末也。性之本。靜而已。善也。惡也者。性之發於情而出者也。末也。混焉者。兼二末而言之。亦是末也。東漢之前。佛法未行。諸中國。故儒者之言性。或不能辨也。宜矣。然其不稽之。孔子子思之教。則失也。佛法既來。夙蘊靈知之士。咸歸吾也。當知孔子之道。與佛相為表裏。而性情之論。如合雙璧。然世之儒生。猶不欲同焉。則無他。以其欲異於釋氏故也。是非君子之道也。君子黨理。同人于宗。吝之道也。韓子甚矣。不黨理而好異也。如此。孔子子思。猶不宗焉。而兼并善焉。混焉之言。三之。而曰。上焉。中焉。下焉。不亦甚乎。上焉而善。下焉而惡。中焉而混。可善可惡者。混也。皆非性之本也。情也已。性之本。靜。靜之體。虛。虛故有靈。靈故有覺。覺故有知。知感於物。感則動。動則欲。欲不可量也。欲而得之。則喜。喜則心平。心平則善也。欲而不得。則怒。怒而無度。則暴惡也。一喜一怒。可以善。可以惡者。情之混。韓子所言中焉者是也。但非性也。性也者。非善非惡。非混善者。惡者。善惡混者。皆情也。性

之末也。性之本靜而已。孟子以善爲性非也。荀子以惡爲性非也。楊子以善惡混爲性亦非也。之三子者不見正於佛教。故誤也宜矣。然其不稽之孔子子思之教則失也。但韓子出乎佛教之後。當見正於佛教。當知孔子之道與佛相爲表裏者也。然獨區區別之。甚哉韓子舍本而取末。與孔子子思之道相遠也。如此甚矣哉。有客過中正子門者。難中正子曰。潛子作非韓以降。儒之欲害於佛者。自詘矣。況於今。此海外鬼方。無復宗韓如歐陽公者乎。假使有之。但用潛子之書。可以屈其人足矣。然今彼書尙無效用。而人不欲觀之。又如子何。子獨如星爾。目如電爾。舌叨叨怛怛。力發於言。而又筆於書。何其徒爲。中正子曰。然客之待予大過也。如予者。豈敢望客之所待者乎。客曰。何謂也。對曰。如予者。麼麼樸樸。不足道者也。豈復有望。以言若書能誦人者。哉。庸人尙不可誦。而況如歐陽公者乎。縱使今吾佛教不幸。而或復有若此人者。予不敢欲以言若書抵排其人也。然今所爲書者。以二三子未明性情之理。故筆而著之。偶引孔子子思之言。以合吾佛教者。而論之也。繇是亂彼孟軻氏以降。言性者之差異。以至韓愈氏原性之言。或未能無誤。故言及此耳。本不欲用此書行于時。以爲名譽之術也。客退。桑華子曰。子嘗言仁義。力排楊墨。鄙心惑之。以謂孟子以後。楊

墨之徒不作。今子何必區區其言爲。今見子對客之言。釋然不復惑之。中正子曰。古之言性情者。於其理也一矣。固不欲異諸人。亦不欲黨也。但於理而已。桑華子曰。何理。對曰。節情復性而已。凡人之情欲無窮於物。而至暴惡。故聖人欲使節其情欲。而復其天性而已。於是制設戒。以使人能養其欲。而不過度者也。故禮者養也。戒禁也。味能養乎口。而禁其嗜者也。香能養乎鼻。而禁其臭者也。聲能養乎耳。而禁其淫哇者也。色能養乎目。而禁其冶容者也。牀榻臥具衣服。能養乎身。而禁其奢而不儉者也。仁義孝弟忠信。能養乎心。而禁其情而不節者也。

(八) 南北朝時代の學者

上、南朝の朴翁 ▲北朝と宋學

菅原公時 ▲紀行親 ▲藤原忠範の反對 ▲夢窓の識見

南北朝の亂世には、軍中にも歌詠をこそ廢せざりけれ、公卿武士並に學を講ずるに暇あらず、誠に學問衰廢の時代たり、南朝は玄惠已に去り、後醍醐も亦崩じて後は、元應元亨の經筵に侍したりし公卿も、亦正中に斃れ、元弘に散し、讀書の種子漸く盡きたりけんも、親房猶存せし間は、道學の命脈を失はず、後村上帝に至りて、朴翁といふもの游和軒昨木子と號し、文學ありて古今に通じ、帝に吉野に事へしが、足利直冬が父尊氏を討んと請ひ、帝之を聽して、綸旨を賜ひし時、朴翁は之を聞き、て、古は忠臣を孝子の門に求むところを云へ、直冬王命を假りて其の父を討んとするは、天理に悖り子道を失へりと嘆息せしとかや、亦是れ名儒の言なるも、其の學の新古如何を知らず。

學問衰廢の時代

游和軒昨木子

北朝にては學問頗る盛なり、曆應二年九月四日、孔子の像を懸けて廟供を備へ、此

菅原公時

紀朝臣行親

夜孟子談義あり、四年三月十三日には中庸御談義あり、光嚴光明二帝の侍讀は菅原公時にして、後醍醐の經筵に玄惠等と論語を講せし人なるが、其の康永元年に薨するや、帝は師授の恩を重んじて、宮中の物音を停められしを異敷なるべき、次に帝に侍讀せしは、大學頭紀朝臣行親にして、康永元年九月二十日、尙書を進講し十月二十三日、尙書及び大學を進講せり、光明院宸記講釋の次、帝行親をして詩を賦せしめらる。

尙書

大學の詩

堯舜禪兮湯武取帝王跡異厥歸同此經五十八篇義惣在無偏無黨中。

大學

萬靈誰不具明德只要新民日々新格物致知非造作方圓長短自天真。

大學進講は新註

行親は元亨二年の尙書御談義に於て、花園上皇より佛教に涉るを戒められし學者なり、大學の在親民の親の字を新に作るは、程子の説にして朱註之に據りたるが、大學の詩を以て之を觀るに、行親は果して新註に因て進講したること明なり、園太曆に光嚴上皇は同じく三年十月廿一日、南朝興國五年、日野資明、鷲尾隆職、及

261077

中庸御談義

儒佛混淆の誠

行親の人物學問

新學派の新註排斥

び行親の輩を萩原殿に召され、禮記中庸の御談義を開かれしを記し、且つ近來儒教と稱して、佛教を混亂する者あり、且禁裏連々御談義の時、少々雜亂の事あり、仍て法皇は是等の儒臣を召して、頻に諷諫あり、是れ文道の紹隆にして、先聖先師も尙擧あるべしと云へり、資明は資朝の弟にして、行親と同じく後醍醐朝に玄惠の宋學を聽きし人、儒佛混淆の戒めを花園院御記と對照すれば、連々禁裏(北朝)に催されて少々雜亂の事ありしといふもの、亦是れ新註の講義なるべし、此の比玄惠も北朝方なりしかば、宋學頗る北朝に行はれけん、行親が貞和元年二月七日盜賊に傷けられて死するや、園太曆は之を譏評して、儒學事隨分誇張、近來諸人之師也、尤不便、但所立之義、不叶聖鑑、歎可怖々々とあり、行親の人物學問も亦推知するに難からず、當時の舊學派が新註派を忌みて排斥に力めしことは、中嚴圓月の東海一濶集に、寄藤刑部忠範詩ありて、學尙漢唐不言今、奮然欲救伊洛弊と言へるに徴すべし、或は衆醉難容、屈原醒、道滴惟見孟軻醇と云ひ、或ひは南家克有廟堂器、東白頗同滄海珠と云へるを見れば、藤原忠範は南家の學者にして、世人が宋學に醉へるを憤慨せし人なるべく、本註派をして斯く憤慨せしむるほどなれば、北朝にて

も一時は新註流行したりけんと思はる、圓月は宋學派の泰斗なるを以て、忠絶とは議論相合はぬこともやありけん、休訝往々擗突多、我本浮雲無根蒂と云譯せる句もあり、以て當時二學派の狀態を知るべからずや。

然れども當時摺紳の學は言ふに足らず、而して五山の文學は、此の時より勃興の期に入れり、虎關の該博、中巖の渾厚、之が先驅を爲して、而して義堂の文、絶海の詩前を承けて後を起し、以て室町時代に於ける禪文學の軌路を開きしが、此は實に足利氏が北條氏崇禪の故轍を踏みしが爲にして、儒も亦禪に因つて絶えざること縷の如きを得たり、而して禪の足利氏に盛なりしは、七朝國師夢窓疎石の力多きを忘るべからず、夢窓の門下に五十餘人の神足ありて、足利時代の名僧は、概ね皆其の兒孫なればなり。

夢窓國師は伊勢の人、聖一門下にして、兀菴無學に參せし高峰顯日に師事し、又一山に學べり、世塵を厭ふて山林に在りしを、後醍醐帝に召出されて南禪に住せしは五十一の時なり、帝其の道行を試みて、嘆稱己ます、帝の崩後、尊氏其の冥福を修めんが爲に天龍寺を建て、帝の殊寵を得たりし夢窓に請ふて開山と爲せしが、夢

五山文學の勃興

夢窓略傳

窓の再住天龍語は、古今に俯仰して、滿腹の感慨を吐けり、曰く

目 夢窓の直

悲哉武臣、遂墮讒譏、陳謝不及、永沈逆臣之膠、而已、以故武家愁嘆切於常流、不敢以恨緒介懷、自雁丹特、特修白業、夢窓國師語錄

尊氏の眼前に尊氏を稱して逆臣と曰ふ、是れ南北に偏せざる禪家の本色に非ざるか、夢窓が南北の争を悲める詩に曰く、

因亂書懷

夢窓の時

世途今古幾窮通、萬否千臧歸一空、傀儡棚頭論彼我、蝸牛角上鬪英雄、須知鷓蚌相持處、終墮閻魔者、鞠中放馬華山待何日、不如頓覺覺城東

夢窓が足利氏に蕪せざる本意自から明なり、而して其の尊氏に勸めて禪を崇び、慈悲を行はしめしは、其罪業を消滅せん爲なりけん、夢窓は立惠死去の翌年なる正平六年、北朝觀應二年に、七十六にて寂せり、其の事蹟は世の知る所なれば省略すべし、其が三會院遺誡に、三等の弟子を論じ、修行純ならず、駁雜學を好むを中等と曰ひ、心を外書に醉はしめ、業を文章に立つる者は、剃頭の俗人なりと罵れるに、徹すれば、衲僧の本色を守りて、儒書を講論せし人にあらず、随つて宋學に直接關

夢窓の遺

◎南北朝時代の學者

係なきが如しと雖も、名分順逆の見は宋學者と符合し、且其の高弟なる義堂周信の新註を義滿に勸むるあり、其の餘禪林の宋學者、往々其法乳に浴する者たり、夢窓の無孔笛、豈無聲の鼓吹なかんや、予れ爲に一炷の香を捧ぐる所以なり。

下、義堂と足利義滿

無文の孝論▲絶海の詩▲祖闡克勤と雲門一曲

足利尊氏義隆の二代は猶馬上の生涯なり、三代義滿に至りては、漸く小康を得て學を師僧に問ふこともありけり、其の師僧は周信字は義堂、空華道人と號し、土佐の人、夢窓門下の魁なり、貞和年中鎌倉管領足利基氏に招かれて圓覺に住せり、日用工夫集に應安元年上杉親術來りて、京師の應藏主孟子を講じ、俗人の聽講多しとの話ありければ、義堂文學を以て政務を補ふべしとて、力學を勸めしこと見ゆるは此時なり、基氏は菅原豐長(至徳三年出家)を聘して師と爲し、幕府の僚佐をして業を受けしめ、是より東人道德仁義の説に薰炙せしこと、空華集に見えたり、義堂の建仁に墮りしは、康暦元年にて、義滿尊信して師事せり、康暦三年義滿義堂に

義堂傳

菅原豐長

義堂の新
舊二學辨

四書を義
滿に勸む

義堂の學
は中正子
に出づ

向て、昨日儒者孟子を講せしが、其の義同じからず、如何と問ひ、義堂は近日儒者に新舊二義あり、程朱は新義なり、宋朝以來の儒學者皆吾が禪宗に參して、一分心地を發明せるか故に、註(實本註)と章句の學とは、迥然として別なり、四書は朱晦菴に盡きたるが、大惠の書は性理學の本たりと答へて、學問を勸めし由も、日工集に見え、又同じ條に、二條准后も新舊二學を問はれ、漢唐の學者は章句に拘り、宋儒は理性に達し、釋義甚だ高し、其は吾禪に參すればなりと答へ、又義滿の前にて孟子を講説するに、元の倪士毅の四書輯釋を以し、大學は四書の一にて、誠意修身の學最も緊要なれば、四書の學を怠りたまふなと勸めしことも見えたり、以て幕府の學に本註新註の二派ありしを知るべし、朱子の學大惠に出づとの説は、虎關禦侮の利器と爲す者、義堂之を襲踏するを見て、其の學虎關に出づと爲すは、皮相なり、義堂の學は實に中巖圓月に出づ、空華集の袁氏羸吟の序に、中巖を稱して學窮理性、文法春秋と云へる、其か中巖に參せしを證すべく、其の文に中也者、非世所謂中也、天下大本之中也と言ひ、天道得中正、別其行也、健地道得中正、則其載也、厚大哉、中正之道也とも云へり、中巖の中正子を祖述する者たるや、明かなり、宜なる哉、其の程

朱を信じて之を公家武家に勸めしや、中巖は義堂の爲に空華集序を作れり、義堂は年六十四の嘉慶二年、南朝元中五年に寂せり、著述は語錄、空華集、日用工夫集等あり、龍湫周澤が義堂と稱せし句に云く、驚人詩律唐禪月、亞聖文章漢子雲。

天龍寺船

十八衆禪客の入明

元代文學の輸入

是より先き、禪僧の入元益多きを加へ、杭蘇の間、寺として日僧あらざる無く、南北朝に入て、天龍寺船の派遣あり、元國貿易は官營に出づ、而して別傳妙胤(康永末年)東陵永興、觀應二年の二僧、興國中に東渡せしは、元僧歸化の殿たり、元末には太初啓原の十八衆と共に海に浮ぶあり、明初には剛中玄柔の十禪客を遣はして大藏を求むるあり、交通盛なる如此くなりしより、義堂は明初に於て早く已に元人倪士毅の四書輯釋をも得たりしなり、以て其の元朝文學の輸入甚だ速かなりしを知るべし、南北朝の入元入明僧中名ある者は、愚中周及、性海靈見、無文元選、大拙祖能、千峰本日、一心自敬、以上元、絶海中津、如霖良佐、鄂隱慧癡、以上入明等なるが、無文元選(後醍醐の子)孝を論じて曰く、

佛教萬行、以戒爲始、戒則以孝爲本、儒教萬行、以仁爲首、仁亦以孝爲本、是故曰、孝悌也者、其仁之本歟、儒釋二教、皆尊崇之、我豈不肯行耶、(無文語錄)

無文の孝論

絶海の詩

亦是れ明教派の儒僧なり、絶海明の大祖の制に應じて、熊野峰前徐福祠、滿山藥草雨餘肥、只今海上波濤穩、萬里好風須早歸の詩を賦し、太祖歎稱して、熊野峰高血食祠、松根琥珀也、應肥、當年徐福求仙藥、直到如今更不歸の和あるは、蕉堅稿中の一大光彩たり、絶海の詩は禪林の空前絶後なるのみならず、詩家往々本邦詩人の魁と稱せり、中巖の文、絶海の詩、並に南北朝の闇黒を照せる二大星光と謂ふべし。

春屋妙葩

和蘭克勤

夢窓の門に春屋妙葩あり、天龍に升り又南禪に住し、始て僧録司に補せしが、是より先き春屋退きて丹後の雲門菴に居りし時、明の太祖我佛を尙ぶを知り、正使趙秩(字可庸)及ひ朱本(字本中)に副ふるに、四明天寧寺の禪師祖剛(號桴菴)及び金陵瓦官寺の講師克勤無逸を以して、游説する所あらしむ、明使一行は久しく征西府に抑留せられしが、文中二年(北朝應安六年癸丑)十月、來りて防州大内氏の城下に在り、春屋弟子(霖上人)を遣はして先師の塔銘を求め、又詩稿を寄示し、翌三年甲寅三月、歸途博多に次りし時も、亦弟子(文溪周允)を遣はして、詩を寄せ物を贈りしが、祖剛は春屋和尚偈頌を、克勤は芥室銘を、朱本は芥室歌を、趙秩は序を作り、並に其の詩に和して之を遺せり、唱和の詩を輯めて雲門一曲(寫本一冊)と曰ふ、趙秩が

雲門一曲

◎南北朝時代の學者

夏日書懷詩の序に性理の論ありて、習善則善、習惡則惡など云へり、其の文拙なれども亦頗る理學に通じけん、而して春屋の弟子を稱して、通儒通釋、聞禮聞詩と云へる、諛言に非ざるを保せざるも、亦筆談儒釋に及びしなるべし。

附 載

倚韻代東奉寄前席天龍芥室和尚

四明天寧 祖 闡

祝團克勤の詩

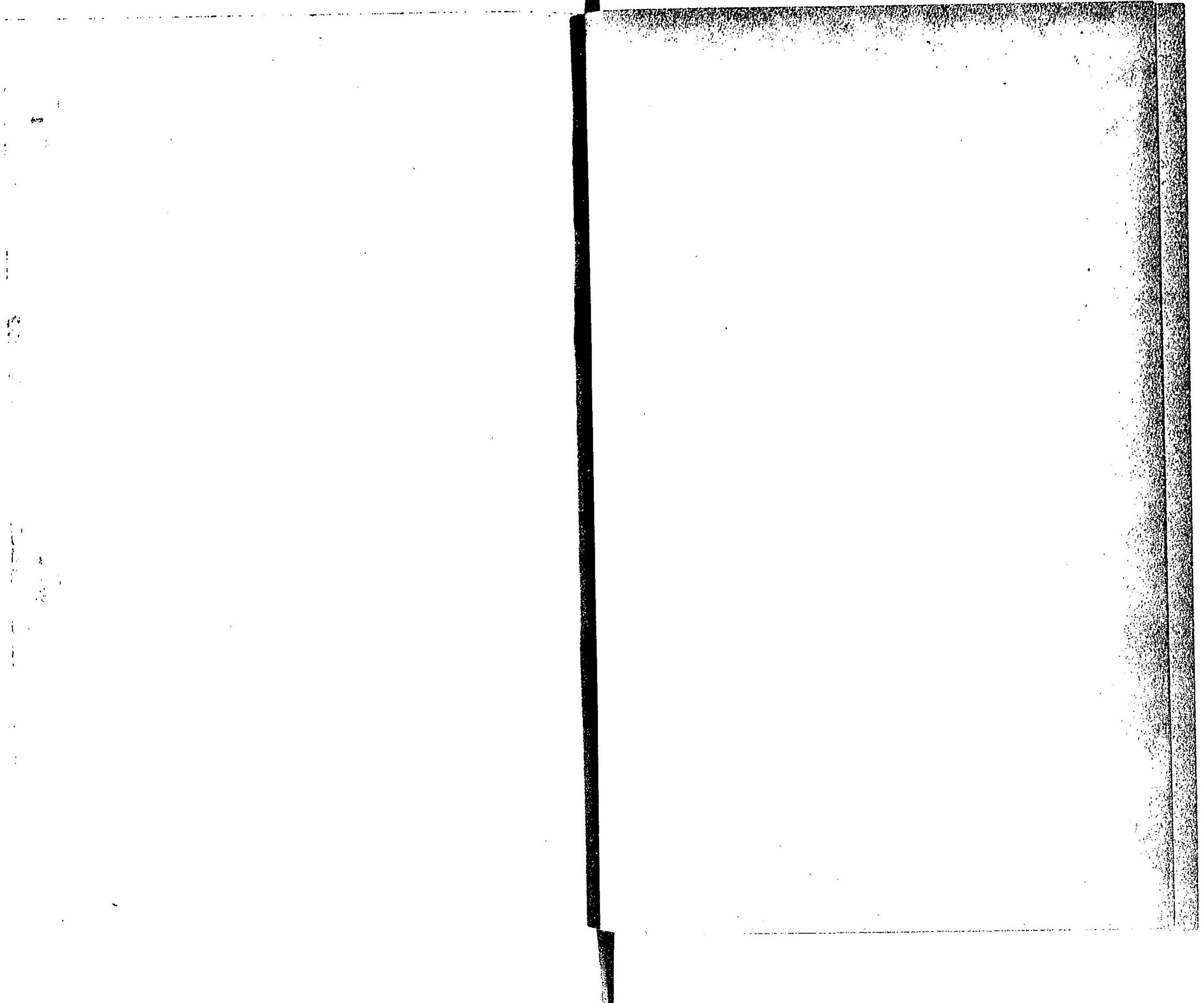
扶過文殊與普賢、豈分東海及西川、神通遊戲塵沙國、瞬息銷磨億萬年、丹後仍聞新氣象、小倉曾祝舊風烟、水晶念珠長船劍、千里持來作信傳、一從象馭過天津、却使陳年話轉新、庚嶺趁來遺鉢鉢、雪山歸去乘金輪、舊房松影還東指、別墅櫻花遶屋春、大法東流常像運、典刑政籍老成人。

次韻偈二首奉答前天龍堂上芥室和尚用仲遠意

瓦 官 克 勤

短札曾裁剡曲藤、魚沈雁杳竟誰憑、扶持象運惟諸老、修學吾宗尙幾僧、鶴髮已聞

吹似穿鷗盟、只覺冷於冰、果公莫恨南行遠、鬱社歸來見中興、丹後高居我所思、三年不見共幽期、向來事業專當代、老去聲名倍昔時、緇素萬人稱弟子、東南一國見宗師、獨承遠寄陽春曲、天地寥々和者誰。





中殿圓月木像

京都元仁寺大經院安置



鼓陽方秀木像

京都東山寺大經院安置



義堂周信木像

京都西門外西門外安置

(九) 岐陽の四書和點

訓點の祖

室町時代に入ては、五山の禪文學殆ど極盛に達し、儒學も亦禪に伴ふて叢林に瀾漫し、禪僧の字號は之を儒語に取る者、十の七八にして、師友の製作せる字號の説は、概ね皆儒學に胚胎せり。仲芳、圓伊の懶室漫稿には、紫陽朱元晦爲天下儒宗、以綱常爲己責の語あり。瑞巖龍惺の蟬菴外稿には、學而齋の詩ありて、客來如問扁齋意。要到尼丘道德中と曰へり。殆ど禪より儒に歸するの概あり、是れ蓋し中巖義堂等の鼓吹せし新風潮に非ずや。宜なる哉。室町時代の初期には、早く已に四書に和點を施す者ありしや、其人を誰とか爲す、不二和尚是なり。

弘法と岐陽略傳
宋學の新風潮
不二和尚名は方秀讚岐の人なるより、字を岐陽と云ふ、佐伯清泰が子なり、正平十六年北朝康安元年辛丑を以て熊岡莊に生る、父は亂を避けて出奔し、母と共に京に上り、外祖父源義大に依りて詩書を學べり、弘法大師が讚岐の佐伯氏にして、少時儒學を外舅阿刀大足に受け、又味酒淨成岡田博士等に從遊せしと、出處相同じき

四書和點
緒に關する點

も亦奇なり岐陽後ち東福の石窓靈源二師に學び十七の時父の喪に三州に奔り遂に相模に赴き翌年京に回りて名を南禪に隸せしが其翌年東福に寓せり元中三年(北朝至德三年)義堂周信が南禪に住して程朱を公家武家に奨勵せし時岐陽も亦從學しけんとの説あり或は云く夢巖祖應の門に遊ぶと夢巖博覽能文中巖と名を齊しくせし者なるが岐陽十四の元中三年に寂したれば暫時こそ教を受けたりけめ又嘗て入元僧の愚中周及にも從へりと傳ふ元中五年には周防の長壽寺に住し翌年歸京して東福に在り應永元年明の天倫一菴二僧來朝せし時書を以て往來し翌年讃岐の道福に開法し應永十八年辛卯には東福に遷り尋ぎて天龍南禪に居り退きて不二菴を東福の側に構へ同三十一年二月二日に六十四(諸書六十二)に作るは誤にて寂せり著述に琴川集及び不二遺稿あり其の四書和點に關する諸説左の如し。

桂菴禪師家法和點に曰く普光院殿御代渡唐船載新註來叢林不事本書之學故不辨新古之好惡東福不二和尚初講此書凡正本國傳習之謬以便於叢林說禪宜於土俗世話爲要而已。

四書傳來
の四書

南浦文集與恭畏園梨書に云く我今說集註和訓之權輿昔者應永年間南渡歸船載四書集註與詩經蔡傳來而達之洛陽於是惠山不二岐陽和尚始講此書爲之和訓以正本國傳習之誤。

中村楊齋四書大全齋頭に云く後小松帝應永十年癸未南都歸船載四書集註詩經集傳來同年八月三日達之洛陽於是東福不二岐陽和尚始講之。

文照軒紫橋新書籍目錄に云く朱子の新註本朝に渡る事は後花園院御宇普廣院御治世東福寺不二庵岐陽和尚始以朱子註講談したまへり(以上二件據茅窓漫錄)

四書の書目は後醍醐朝已に明文あり況や義堂は元の倪註をさへ講じたるをや四書傳來の始を應永中にありと爲して岐陽始めて之を講すと云へるは固り誤謬に屬す而して其の誤謬は桂菴の家法和點に本けり家法和點に普廣院殿の時と爲せるも應永は勝定院殿義持將軍の時代にして岐陽は長得院殿義量將軍の代に寂し普廣院殿義教將軍の代には此の世に亡き人なり蓋し家法和點は展轉傳寫せし者にして慶長十六年寫本は紙數も刊本より多かりしと云ひ儒釋道三

大椿

敦の年代も、原本と異りて元和十年迄を算したる如き、正しく如竹刊行の時に改めし者と見ゆれば、此の普廣院殿云々の一二條は、當時誤つて竄入せし者にもや、南浦が岐陽始て之を講すと云へる、亦其の誤を襲へり、茅窓漫錄及び有文故事引く所の臥雲日件錄寶徳元年閏十月三日の條に、長照院竺華が、吾翁大椿は筑紫の人なり、少年東游し常州師に就きて四書五經を學べりと語りしと云へる、大椿其人は、岐陽と同門の弟子周亨、字は大椿、南禪寺の沙門なりと、井上氏の京師朱子學の起原に見えたり、同門とは常州師の門にや、常州師とは何人なるを知らざるも、岐陽が游學歷參の中に、大椿等と同じく四書を讀みしや明なり、而かも其が四書集註の舶來本を手に入れしは東福に住せし應永中の事にもや、而して始て之に和點を施せしなるべし、古來論語孟子等には古點あるも、新註は猶無點本にて受讀し、末學の不便淺からざりけん、岐陽點を施してより、門下の喜知るべし然れども、其書は傳らず、建仁の龍雲菴に岐陽の講説を書入し論語集註ありしこと、家法和點に見ゆれど、此すら搜訪に由なきを奈何せん、但し岐陽講筵の説なりとて家法和點に引く所に據れば、岐陽は唐土の府州郡縣必ず學校あるに、日本は足

岐陽書入

常州師

岐陽の功

利學校あるのみ、其すら新註を用ひず、後來本書の學に志ある者は、速に新註の書を求めて之を讀むべしと云ひ、不二遺稿を讀むに、横渠の學は吾釋氏に出づと云ひ、又易學啓蒙を讀みて、程子の所謂一部華嚴經を看るは、一長卦を看るに如かずとは之に近しとも云へり、其の程朱尊信や至れり、僧師蠻は岐陽の著述宗門に功あること、濟北師(虎園)に譲らずと贊せり、豈嘗に宗門の著述のみならんや、四書和點を草創して群英を教育し、遂に桂菴文之を孵化して、以て徳川文學の隆運に資す、儒學上の功や大なり、岐陽門下の翹楚には雲章一慶、惠鳳、翔之、惟肖、得巖等あり。

(十) 岐陽の學派

一、雲章一慶と雲桃抄

雲章略傳

岐陽門下の翹楚なる一慶は、字を雲章と云ひ、左大臣藤原經嗣の子、彼の名高き一條禪閣兼良の庶兄なり、元中三年(北朝至德三年)を以て桃華坊の第に生る、六歳にして山崎の成恩寺に投じ、十六剃髮、十七の應永九年、明僧天倫一菴に見えしに、天倫器重して、十二年前蚤出家、因縁傳得祖袈裟、黃梅夜半曾分付、把住無容失、左車の傷を贈れり、岐陽に參して朝昏辛勤、内外を綜究し、東福に居て、岐陽と碧巖集を評論し、永享三年普門寺に住し、後小松天皇の前に元享釋書を講じ、後ち東福南禪を歴董して、東福の資活菴に退老し、寛正四年に寂す、年七十八なり、常に禪林の流弊を矯めんとて、百丈清規を講じ、清規要綱を撰び、五燈一覽圖を作り、又程朱の説を喜び、理氣性情圖一性五性例儒圖を作り、雲章岐陽より少きこと二十一歳、岐陽寂せし時は、雲章年三十九なり、其の從學の久しき、得る所の者甚だ多かりけん、雲章の百丈清規を講せし時、桃溪瑞仙の筆記したるを雲桃抄と曰ふ、永正六年寫本

百丈清規
の講義

の雲桃抄奥書に云く。

寛正三年歲在壬午八月十日瑞林之東軒抄畢。蓋雲翁始講於惠日之資潛而終卷於鷲峰。從己卯春(長祿三年)迄今四更星霜焉。其間或斷或續而辛巳之歲一切已之。以儼疾而事繁也。吁其艱險一至此哉。然臨其席者皆一時名勝。吾山(相國寺)則益之箴公。月公匡公。笑溪懼公。陽谷杲公。叔鳳逸公。南英礪公。菴泉証公。月卿規公。壽春永公。橫川三公。萬里九公。芳湯春公。景徐麟公。龍阜(南禪寺)則希世彦公。利沙濠西堂。蘭坡蔗公。東山建仁寺則正宗統公。天岩澤公。桂林昌公。古雲云公。惠峰(東福寺)則大痴和尚。春起和尚。岷江和尚。天覺綱西堂。桃溪悟公。季弘叔公。春湖鑑公。萬壽之天祐殿公。與予桃源之所發起也。他日以此人行此書於列刹。未爲難矣。所恨皆不全其書。有上卷而終者。有下卷而始者。意者一二而止。勤者三四而闕。唯當相共補益。力行之可而已焉。

余之所發起者仙桃源和尚歟

永正六年己巳正月廿六日午前筆畢

是に因て之を觀れば雲章七十四の時に講を始め、飢餓疾病の中に困苦しつゝ、七

臨終人名

雲桃抄の性理說

十八の歿年より一年前に終りし者なり、雲桃抄は俗話の儘に筆記して、程朱性理の説に及ぶ者甚だ多し。

報恩章第三 曾子は孔子の孫子思に傳へ、子思は孟子に傳へたぞ、孟子歿して性といふ事は絶て不傳ぞ、漢儒は遂に性を不知ぞ、宋儒始て興たぞ、唐の時に韓昌黎が何も不知者なれども、のりして孟子に拜塔にならうとて、文章八代の弊だぞ、されども漢唐の間に昌黎ほどにせりよせたものもないぞ、宋朝に濂溪先生周茂叔が大極なりと云たから、始て二程に傳へ、二程から朱晦菴に到て儒道が一新したぞ。▲論語孝弟也者其爲仁之本歟と本註は心得たぞ、孝弟は幹で仁は枝葉のやうに心得たぞ、ナニがさではあらうぞ、爲仁猶曰行仁、朱子の註語であるほどに、孝弟也者其爲仁之本なり、新註は本註にまさりたが、道理な事には、性と云ふ事をよく知つたほどにぞ。

尊祖章第四 昌黎が孟子より後は性と云ふ事を不知して絶たとして、ひつたぬいで、原性と云ふものを作たぞ、されども宋朝に至ては、ツヨウ昌黎をそしつたぞ、チツとも不知ものになつたぞ、朱熹は諸儒を究めてあるほどに、云

新註は本註にまさり

つた事が本ぢやほどこにか、李誠允といふものが性理至要と云ふものを作って、朱熹を破したぞ、儒教と佛教とは同じものなれども、儒者がよく不心得して、習慣之性氣質之性と云ぞ、佛教にも法相宗などは、餘深密經に本づいて五性各別ぞ。

大學成
定惠

住持章第五 三綱領八條目之中では、修身が簡要ぞ、修身の二字でおさまつたぞ、格物致知誠意正心は修身でなうてはかなうまい事ぞ、身をだに修めたらば、齊家治國天下は自然にあらふぞ、其様に三學も次第を以て云へば戒定惠ぞ、三學の中では定が簡要ぞ、修定者不思善不思惡で、善と云ふ事もないほどに、惡はナニがあらふぞ、さる上は戒は破る事はあるまいぞ、定をだに修したらば、惠は自然になうてはかなうまいぞ。

其の餘儒佛を對照していと面白く、漢儒は才こそあつたれ、道をば知らぬぞ、宋儒でなうてはぞと説きて、皆新註に引據せる、崇信頗る厚し、百丈清規雲桃抄は、實に雲章の學風を見るべく、亦因て以て岐陽の學説をも窺ふべき者たり、予故に二三を摘録すること如此し。



了
崔
佳
悟
筆
蹟

上
甘
製
光
其
所
製



崔
佳
悟
筆
蹟

辛
巳
年
丁
未
月
初
九
日

二、雙桂得巖の師承▲惠鳳翔之の崇信

惟肖略傳

雲章の講侶なる惟肖は、名は得巖、自ら蕉雪と號す、備州の人、十六京に上りて草堂林芳に従ひ、經史子集、搜抉せざる無く、文を以て名を馳せたり、應永中相國に居り、尋ぎて辨の棲賢、洛の眞如、萬壽、天龍を歴て南禪に住し、晩年雙桂院を其の側に構へて之に居りしより、人稱して雙桂和尚と云へり、好んで坡詩を讀み、又莊子口義を講じて、鈔十卷を作れり、著述は語錄及び東海瓊華集(寫本四冊)あり、其の生年及び歿年月詳ならず、漢學紀源は高僧傳の夢巖祖應傳に、岐陽秀惟肖巖等も皆其の門に遊ぶとあるを引きて二人同門と爲せり、祖應の死せしは文中三年北朝應安七年にして、岐陽は時に年十四なり、應仁の遣明使を選びし時、惟肖は試才の任に在りしと云へば、惟肖十六入京以後、祖應の門に遊びしものと見て、年を算するに、應仁には百十餘歳なるべけれど、左程の長命如何あらん、此の説蓋し高僧傳の誤にもや、然れば二人は同門に非ず、景徐周麟の翰林胡蘆集に、蕉壁、絶海和尚、明の季潭に従ふて四六を學び、其の門に登る者は雙桂、太白、墨仲、之が頭角たりとありて、

惟肖岐陽
と同門に
非ず

絶海の門下

惟肖が絶海の門に遊びしは明かなり、絶海は義堂の友にして、明に在ること八九年、儒學も亦造詣あり、而して義堂の得たりし四書倪註の如きも、亦或は絶海の歸遺に出でし者ならん、則ち惟肖の絶海に得る所、獨り四六文のみに非ざりけん、南浦文集には、東山に惟正あり、東福に景召あり、二老は時の名衲にして、同じく不二の門に出づとあり、漢學紀源の惟肖傳に、惟正は惟肖の誤、景召は景徐の誤ならんと云ひて、惟肖は岐陽同門なれども、宋學は之を岐陽に受くと爲せり、而して其の桂菴傳には、惟正景召を別人と爲して、前後相符せず、按ずるに、景徐周麟は岐陽寂後十七年の永享十二年に生れし人なれば、景召を景徐の誤と爲して、同じく不二の門に出づと謂へるは年代を誤れり、景徐は蓋し雲章及び惟肖に學びし人ならん、要するに禪僧は嗣法の系統を重んじて、儒學の師承は之を度外に置くが故に、岐陽惟肖の如き、學統を證すべき史料に乏しく、歴參を事とする彼等は、何人より學び來りしやを知る可からず、姑く先賢の定論に従つて、岐陽は義堂に出で、惟肖は岐陽に出づと爲さんのみ、但惟肖は桂菴の師なるを以て、略考索を費すこと如此し。

惟肖の能文

惟肖の莊子口義鈔は予未だ之を讀まず、東海瓊華集を讀むに、大内文學に關する者多し、彼は能文を以て名を得たりしかば、永享四年義教將軍の使を明に遣し、時命を受けて書を作り、六年又國書を作れり、是より先き義持將軍、前代外交の失體を恥ぢて、明國交通を絶ちたりしが、此に至りて又も交通を開けり、而して惟肖は蓋し當時の外交秘書官なり、大内氏は明國交通の任に當りし者なるより、惟肖と大内氏との關係頗る深き者ありしならん、予は惟肖の宋學に關する所説を擧ぐる能はざるを憾むも、其の門下に希世靈彦、横川景三、景徐、周麟、蘭坡、景蔭、及び我が桂菴玄樹禪師の如き者あるは、亦是れ大なる述作なりと謂はざる可からず、惠鳳字は翺之、美濃の人、岐陽に師事して發明する所あり、嘗て明に入て游學數年、歸朝して東福の岩栖院に居り、嘉吉元年義政將軍貧民を救助せし時、徳政論を作りて之を上れり、歿年月詳ならず、著す所西游稿、竹居清事あり、合して惠鳳藏司遺稿と曰へり、詩文俱に妙、雲章禪師行實は其作なり、竹居清事に晦菴序あり、云く、

惠鳳の朱子崇信

建安朱夫子、出於趙宋南遷之後、有泰山巖々之氣象、截戰國秦漢以來上下數千載、間諸儒舌頭、射出新意、聖賢心胸、如披霧而見太清、數百年後、儒門偉人名流、是

其所是、非其所非、置之於鄒魯聖賢之地位、仰之如泰山北斗、異矣哉、三光五嶽之氣、鍾乎是人、不然、奚以致有此乎、

崇信の深き如此きは、亦岐門の學風なるべし、徳政論には、凡そ天下を治むるに、仁以て經を成し、義以て權を成す、寛と雖も義に忘る可らず、察と雖も仁に忘る可らずの語あり、以て儒學に深きを見るに足れり。

三、雲桂二門の俊秀

百丈清規聽講者 ▲萬里居士と太田道灌

▲希世靈彦の夙慧 ▲桃源瑞仙と性理

雲桃抄の奥書に見えたる聽講人名は、未だ必ずしも門人簿とは稱する能はざるも、皆雲章に従つて宋學の緒餘を聞きし人々なり、桃源稱して一時の名勝と爲す、子の寡聞、未だ其の字號を知らざる者あり、今高僧傳五山文學小史、上村閑堂著、百人一首小傳、徳富蘇峰著等に因て、略其の傳記を考ふ可き者數人を附傳す、數子者中、業を雙桂に受けしもあり、蓋し雲桂同門、其の徒も亦分別を要せず。

益之集箴

益之集箴は懶菴と號し、天龍に住して、長享元年に寂せり、横川其の像に贊して、詩禪文僧中無雙、眞草行天下爲一と云へり。

横川景三

横川景三は別に補菴と號す、京師の人、等持南禪等に住し、文墨を以て名あり、明應二年に寂し、著述に京華集寫本六冊、小補文集同一冊、東游集同一冊、百人一首同一冊、五山詩僧百人の詩等あり。

萬里居士

萬里集九は梅花又は漆桶道人と號せり、初め業を相國の大圭和尚に受けしが、後應仁の亂を避けて江濃尾の間に放浪し、遂に還俗して妻を娶り子を生めり、當時桃源和尚に與へし書に、不肖換服以來、平生の識面、笑ふあり罵るあり、涕泣するありなど云へり、禪林には棄てられけんも、才學あるを以て時に推されしなるべし、後武藏に遊びて太田道灌の師と爲りしが、道灌武略世に秀で、又文學を好みしかば、萬里居士の爲に一字を築きて梅花無盡藏と名け、以て風雅の友と爲せり、道灌は江戸城に靜勝軒といふを築き、洛下の名柄に題詠を求め、萬里をして其の記を作らしむ、靜勝の二字は尉繚子の兵以靜勝の語に取りしものなり、萬里に相州

太守の宴に陪して始めて道灌公の舞を見し詩あり、道灌菅公廟を城北に建て梅

花數百株を植ゑしが、萬里と廟下に遊びて詩を賦せり、道灌は優にやさしき武人なりけり、萬里後ち越後の長尾氏に客たり、其の歿年を詳にせず、著す所の梅花無盡藏は、收めて續群書類從に在り、花菴序に明道先生の語を引きて、司馬君實の言を稱せしが如き、程朱學を雲章に學びしに因るか、然れば宋學は萬里に因て道灌にも及べるなるべし。

村菴

希世靈彦は村菴と號す、京師の人、幼より南禪の斯文和尚に師事し、夙慧不群を以て、義持將軍の寵を得、八歳の時、後小松天皇の宴に陪して、應制の詩に不意青雲上、揮毫賦野詩の句あり、惟肖得嚴字を命じて、希世と云へるは、之が爲なり、後ち惟肖に従學して、詩文並に進めり、長享二年歿す、壽八十六、遺著に村菴稿(寫本三冊)あり、中に史料多し。

利沙宗漆

利沙宗漆は南禪二百十四世なり。

正宗龍統

正宗龍統は學而齋と號せし、瑞巖龍惺に學び、建仁南禪に居り、明應七年に化せり、遺稿に禿尾長柄帶あり。

桂林徳昌

桂林徳昌は薺菴と號し、學内外に涉りて、聲當世に聞ふ、景徐其の壽容に贊して、言

言周情孔思、字々柳骨顔筋と云へり、建仁に住すること十回、江州に終りき、青松録あり、叢林に行はる。

季弘大淑

季弘大淑は蕉菴又は竹谷と號す、備州の人、文明中東福に住し、文明十九年歿せり、文墨を以て聞え、蕉菴遺稿あり。

天祐梵巖

桃源と共に雲章に請ふて、百丈清規の講義を發起せし、天祐梵巖は萬壽に出世して、萬壽語錄萬壽寺記の著あり、内外を該貫するを以て推されたりき。

桃源瑞仙

桃源瑞仙に至ては、當時に聞えし、程朱學者なり、雲章より少きこと四十八歳、永享五年を以て江州に生る、竹處、正菴、蕉雨、亦菴、春雨、村僧等の號あり、文明十八年相國に住せし時、周興彦龍が疏に、性學門戶、理學淵源、(半陶稿)と云ひ、天隱龍澤が疏に、別灯、拙釋漢史、費通鑑十九年之功、(隨得集)と云へり、經史並に宋儒を宗とせしを知るべし、寛正中梅岑軒を相國寺に作りて、之に居りしが、横川景三と共に應仁の亂を、江州飯高山下に避けて、京極氏の麾下なる小倉將監に依れり、年五十七にて延徳元年に寂しき、桃源坡詩を抄して、蕉雨餘滴と云ひ、周易を抄して、百衲襖と名けつ、易は蓋し其の得意なるより、別に點易齋と號せり、又片假名にて諺解せし史記抄

易と史記

(寛永三年活版あり、其の集を蕉雨稿寫本三冊)と曰ふ、予は其の手寫本を見しに、細楷甚だ妙、詩あり文あり、朋友の作あり、隨筆の類あり、桃源の好古篤志なる、雲桃抄を名山に留めしは、亦尙ぶ可らずや。

周興彦龍

周興彦龍は山城深草の土器師の子、時人之を稱して章句彦龍と曰へり、文章を能くして尤も駢體に長せしが、年三十四にして逝けり、其の著に半陶稿あり。

天隱龍澤

天隱龍澤は播州の人、錦繡段の編者にして、嘗て桂菴の文集に跋せり、其の眞如に住せし時の疏に、禪文詩如春在花、儒釋道似水歸海の句あり、年七十九の明應九年に寂す、天隱錄寫本三冊、默雲稿同一冊、默雲集版一冊の著あり、程伊川贊に、宋有醇儒稱二程と云へるに觀れば、其の學知る可き也。

以上は宋學との關係固より深淺同じからざる者あれど、桂菴同時の學僧なるを以て其の梗概を録せり。

四、桂菴の講侶

蘭坡景淮▲了菴桂悟▲景徐周麟

國之文字者為大家及諸儒
 紳輩皆文儒之擇也咸惜其古
 者為珍重雖錄也器固非徒
 為遺者要安得有序
 嗚呼正德末歲在癸酉
 餘姚王守仁

送日東正使了庵和尚歸國序
 世之惡奔競而啟頓首者多過
 而之擇焉為釋之道不曰清乎
 而不得不自擊乎禪而不樂也必
 息慮以流塵物行以離偶斯為
 不流於其道也尚不如是則難哉